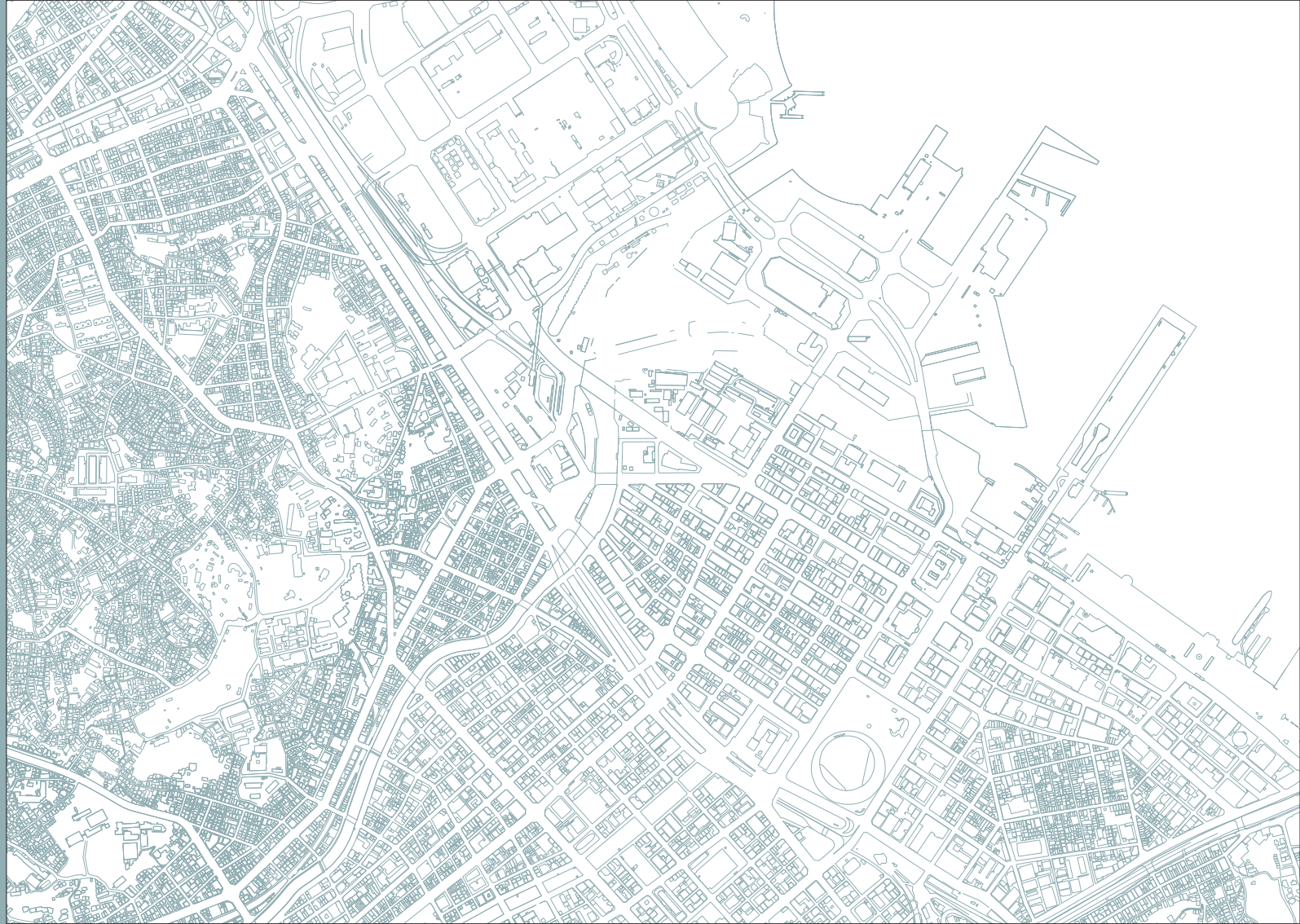
yokohama harbor city studies 2012



yokohama harbor city studies
2012

横浜ハーバーシティ·スタディーズ
2012

Director	門脇耕三	Kozo Kadowaki
	南後由和	Yoshikazu Nango
Coordinator	中津秀之	Hideyuki Nakatsu
Adviser	鈴木伸治	Nobuharu Suzuki
Lecturer	吉村靖孝	Yasutaka Yoshimura
	久保田裕之	Hiroyuki Kubota
	中野豪雄	Takeo Nakano
	成瀬友梨	Yuri Naruse
	猪熊純	Jun Inokuma
	西田亮介	Ryosuke Nishida
	馬場正尊	Masataka Baba

A team	岡佑亮	首都大学東京大学院建築学域修士1年
	奈雲政人	慶応義塾大学大学院メディアデザイン研究科
	黒川明未	明治大学理工学部建築学科4年
	竹生裕喜	明治大学情報コミュニケーション学部3年
	根市拓	東京都市大学工学部建築学科3年
	藤枝大	東洋大学法学部法律学科3年
	栗林新太	早稲田大学大学院文学研究科文化人類学コース
B team	宇野達也	首都大学東京大学院建築学域修士2年
	澤谷理裕	関東学院大学工学部建築学科4年
	室橋祐貴	慶應義塾大学経済学部4年
	宮島真吾	明治大学情報コミュニケーション学部3年
	柴崎康介	関東学院大学工学部建築学科3年
	角田彰利	武蔵野美術大学視覚伝達デザイン学科4年
C team	村田陽介	東京大学大学院新領域創成学科社会文化環境学専攻修士2年
	藤田一真	関東学院大学工学研究科建築学専攻修士1年
	上田将也	首都大学東京都市環境学部建築都市コース4年
	今川智貴	明治大学情報コミュニケーション学部3年
	柴侑里	関東学院大学工学部建築学科3年
	曽我明宏	首都大学東京都市環境学部建築都市コース3年
D team	藤原和己	法政大学大学院デザイン工学研究科建築学専攻修士2年
	内藤祐輔	関東学院大学大学院工学研究科建築学専攻修士1年
	長谷川駿	早稲田大学創造理工学部建築学科4年
	秋葉正登	関東学院大学工学部建築学科3年
	湯浅智朗	明治大学情報コミュニケーション学部3年
	安留佳佑	首都大学東京都市環境学部建築都市コース3年
Staff	菊地未来	関東学院大学大学院工学研究科建築学専攻修士2年
	中川ちあき	YCCスクール
	岩井桃子	YCCスクール



harbor city

yokohama

studies 2012

目次

04 **都市デザインにおける「夢の実験」は続く**
中津秀之

06 **港町ヨコハマを分析する**
鈴木伸治

08 **yhcs2012について**

09 提案コンセプト：
都市の書き替えと横浜の新しい「構え」

10 **概要**

12 **プロフィール**

14 **都市構造の転換を促す「読み替え」の作法**
門脇耕三

18 **リサーチと設計をつなぐインフォグラフィックス**
南後由和

23 **Proposal**

24 **A team**
岡佑亮 / 奈雲政人 / 黒川明未 / 竹生裕喜 / 根市拓
藤枝大 / 栗林新太

32 **B team**
宇野達也 / 澤谷理裕 / 室橋祐貴 / 宮島真吾
柴崎康介 / 角田彰利

40 **C team**
村田陽介 / 藤田一真 / 上田将也 / 今川智貴
柴侑里 / 曽我明宏

48 **D team**
藤原和己 / 内藤祐輔 / 長谷川駿 / 秋葉正登
湯浅智朗 / 安留佳祐

58 **yhcs2012が提示したもの**

都市デザインにおける「夢の実験」は続く

中津秀之

ランドスケープアーキテクト
関東学院大学准教授

2010年の夏にスタートした『横浜ハーバーシティ・スタディーズ・ワークショップ』は、文部科学省「戦略的大学連携支援事業」によって横浜市馬車道に設立された「北仲スクール」の活動として2年間開催されました。文科省の助成金が終了した時点で、私自身、このワークショップ活動は「楽しかった夏の夢」として封印しようと考えていました。しかし先輩たちのワークショップ活動を知っている後輩学生たちの強い要求に突き動かされ、資金的な裏付けの無い中、第三回目の企画をスタートさせたのは、既にTシャツで外を歩ける季節になってからでした。

2012年初夏。明日から7月になろうというその日に、京王線明大前駅に隣接するカフェにお集まり頂いたのは、建築や都市のシステムに関する先進的な論説で注目されつつある門脇耕三氏と、都市に関する論考を多く手がける社会学者の南後由和氏でした。この二人の化学反応を、横浜という培地で試してみたい…という極めて個人的な興味からの人選でした。元々このワークショップには、毎回プログラム・ディレクターを替えることで、常に新鮮な視点を横浜の地に注入するという裏テーマがあったので、空間創造に特化しない活動家の刺激で都市を揺さぶってみることは、誰もが「縮退」を叫ぶ都市デザイン業界に、新たな一石を投じるという意義があるのではと考えたのです。

時代の先端を走る御両人にプログラム・ディレクションをお願いするために、私が座長を務める関東学院大学戦略的プロジェクト研究「地域における次世代を担う子どもを育む創造的アプローチに関する研究」から資金を提供することにしました。この研究は、昨今注目される地域マネージメントを、「こども環境学」の視点から再考することで、新しい社会的な

仕組みを模索することを目的としているので、都市空間から社会の仕組みまでを縦横無尽に議論するワークショップを開催するには、最適だと考えました。

今回のワークショップで重要視したのは、日本の教育政策上、便宜的に作られた「理系」とか「文系」といった引き出しを、根底からヒックリ返すことでした。通常「理系」と区分けされた教育制度の延長上に位置する建築教育を享受した専門家が創り出してきた「建築」と、その集合体である「都市」が疲弊し切っている現代社会において、いくら「理系」の視野で逡巡しても答えは見出せないと思えるからです。実はこのジレンマに、建築学科の教員として日々直面しているため、この機会に抜け道を模索したいとも考えておりました。

横浜市は、日本の都市デザイン発祥の地です。特筆すべきは、「50年先」を予測した計画を立案し、バックキャスティングによって粛々と事業計画を積み上げ、現在の都市空間に成長させてきた経験があることです。1960年代に田村明氏を中心に立案した都市が完成に至り、次の50年を模索している横浜市は、横浜港を中心とする「インナーハーバー構想」を打ち立て、現在、港湾エリアとして工業系業務地区となっている水辺に、数十万人の定住を想定するようになりました。これは都市建設の目的を、モノからヒトにシフトする大きな発想の転換です。この発想バトンを受けて疾走する次世代のデザイナーの職能こそ、新しい建築家の姿かもしれません。そんなことを夢想しながら、今年の『横浜ハーバーシティ・スタディーズ・ワークショップ』は企画されたのです。

港町ヨコハマを分析する

鈴木伸治

都市デザイナー
横浜市立大学准教授

今年のハーバーシティスタディーズにおいては、これまでよりも都市どのように読み解くかという点に力が注がれていたと思う。

都市の読み解きを行う中で、注意しなければならないのは、物理的な空間の形状や、統計的な数字には現れないような「質」の問題である。

関内は開港以来の横浜の中心ではあるが、その中心性は大きく変化し続けている。歴史に詳しい方々からは、かつて「極東総支配人」、とよばれたビジネスマンが横浜にはいたと聞く。つまりアジアにおけるビジネスを統括する拠点として横浜に拠点を置いた時代があったということである。また、時代が下り、みなとみらい21地区の開発によって、大手企業の立地は関内からみなとみらい21地区へと移った。そして、関内地区は行政と小規模なオフィスビルとマンションが混在する複合的な市街地となった。

1990年代以降の「失われた時代」に入ると神奈川支店の東京本社への廃止統合などという話が頻繁に聞かれるようになり、さらに現在は東京の商社の主力部門がシンガポールに移転するなどといったニュースも聞く時代である。関内はオフィス中心の町とは言われていいても、その質は、かつてと大きく異なるのである。これは、横浜だけで解決できる問題ではなく、アジア経済の地政学的中心との距離感の問題でもある。

また、こうした質的な変化は緩やかに起こるために現象としては捉えにくい。分かりやすい例は中華街である。かつての中華街を知る人からすれば、現在の中華街の風景は隔世の感があるという。中華街はもっと怪しく、そして危険な香りの

するまちだったという。また、空間的な広がりで言えば、かつての中華街はもっと狭く、用途に関しても飲食店と物販店舗が混在する町であった。こうした変化は10年単位で見ていかなければ明確には認識できない。そして、現在の中華街もこの10年程でその様相を変えつつある。かつてのメインストリートに店を構えていた老舗の閉店が続き、新たな店舗が明らかに増えている。その背後にはファンドによる土地建物の買収という大きな社会経済状況の変化が見て取れる。表面上は分かりにくいが、確実な質的変化が中華街では起こっている。

こうした都市の質的変化に対して、いわゆる「都市計画」は積極的に対応してきたとは言い難い。それは、誰によって運営されるどのような店舗であっても、統計上、そして都市計画上は店舗であることに違いはなく、その違いは何ら意味を持たなかったのである。しかしながら、都市間、そして地区間競争の時代にあっては、都市のイメージや質を高めることは極めて重要な課題である。そのためには都市に参画するさまざまなプレーヤーの意思をある方向へと導いていくような、マネジメント型の都市計画が必要である。そして、こうしたマネジメント型都市計画を可能とするためには、都市に対するリサーチも、質の変化を丹念に読み解くことが求められていると言えるだろう。

yhcs2012について

横浜ハーバーシティ·スタディーズ（yhcs）は、2010年度より始動した短期集中型ワークショップです。横浜の都市状況をフィールドワークし、専門家と議論を行い、最終的に都市再生のアイディアを提案するものです。

2012年度は、プログラム·ディレクターに門脇耕三氏（建築学者 / 明治大学専任講師）と南後由和氏（社会学者 / 明治大学専任講師）のお二人を迎えました。期間中（2012年9月1日-9月8日）には、著名な建築家·人文社会系研究者などを招いたレクチャーと議論を活発に行い、都市に対して総合的にアプローチする、例年になく学際色を強めた刺激的なワークショップとなりました。参加学生も10を越える大学から文系·理系様々な大学院·学部の学生が集まりました。

また、yhcs2012では、建築系と人文社会系の知識を架橋するツールとして、情報やデータをわかりやすく、ヴィジュアルに、かつ提案的に表現する「インフォグラフィックス」という概念を援用しながら、「提案コンセプト」に基づき、リサーチと提案に取り組みました。ワークショップ期間中に、グラフィックデザイナーの中野豪雄氏を招き、インフォグラフィックスとグラフィックデザインの基礎を学ぶワークショップを実施したことも大きな特徴です。本ブックレットは、yhcs2012参加学生のリサーチと提案の成果物を、中野豪雄氏のデザインによりまとめたものです。

都市の書き替えと横浜の新しい「構え」

提案コンセプト

都市の姿かたちは、大小、有名無名を問わず不特定多数のプレイヤーによって書き替えられ続けている。エリアごとに異なる雰囲気を醸し出す横浜には、都市開発·都市再生の多様なプレイヤーが混在し、所有者別に建物の構え＝顔が異なる。たとえば日本大通には庁舎、馬車道には銀行、海岸通には港湾施設、みなとみらいにはオフィスや商業施設が目立つ。

しかし、近年の都市再開発ではゾーニングが機能しにくくなる一方で、建物の所有の形態が変化し、建物のビルディングタイプとそこで行われるアクティヴィティの間の対応関係も崩れてきている。都市に「住まう」という営みが、従来の住宅や職場という境界を越えて、複数の場所をネットワーク化するなかで展開されるようになって久しい。またインターネットやSNSの普及により、シェアオフィスやシェアハウスが注目を浴びるなど、人々の集まり方、集まる場所、場所の使い方も変化し始めている。

そこで、このワークショップでは、建築·都市工学と人文社会系のアプローチを架橋しながら、横浜アイランドタワーを中心とした4つのエリアの建物の所有者、顔、プログラムの変遷を写真や統計データで収集し、官、民、半官半民、NPO·市民団体、個というプレイヤーごとにどのような既存の建物の読み替えが繰り広げられてきたのかをインフォグラフィックスも用いながら可視化する。そのうえで、今後どのようなプログラムの統合、ハイブリッドが行われるかを予測し、横浜の新しいビルディングタイプや都市のヴィジョンを提案する。

概要

yhcs2012は、午前中から夕方までをリサーチ・提案作業にあて、夕方からゲスト・レクチャラーを招いたレクチャーと提案・作業内容に関するディスカッションを行い、次の日の作業に備える、という流れを基本として進めます。また、yhcs2012はヨコハマ創造都市センター(YCC)を会場として行います。

会場：ヨコハマ創造都市センター(YCC)
〒231-8315 横浜市中区本町6-50-1

	9/1. sat	9/2. sun
10:00		
11:00	**開会式**	**フィールドワーク・リサーチ・プレスト**（適宜休憩）
12:00	Lerture 1 **都市の構え・読み替え・書き替え** 門脇耕三 / 建築学者 南後由和 / 社会学者	
13:00		
14:00	Lerture 2 **横浜の歴史と成り立ち** 鈴木伸治 / 都市デザイナー	
15:00	**フィールドワーク**	
16:00		Lerture 3 **インフォグラフィックスと都市** 吉村靖孝 / 建築家
17:00		**レクチャラーとの提案・作業内容に関するディスカッション**
18:00	**ディレクターとのディスカッション**	
19:00		
20:00		

9/3. mon

フィールドワーク・リサーチ・ブレスト（適宜休憩）

Lerture 4
家族・若者・高齢者の変容と居住のあり方
久保田裕之 / 家族社会学者

レクチャラーとの提案・作業内容に関するディスカッション

9/4. tue

Lerture 5
インフォグラフィックスの基礎
中野豪雄 / グラフィックデザイナー

インフォグラフィックスとグラフィックデザインに関するワークショップ
中野豪雄 / グラフィックデザイナー

9/5. wed

リサーチ・提案作業
（適宜休憩）

Lerture 6
シェアが切り開く建築と都市の新しい姿
成瀬友梨 / 建築家
猪熊純 / 建築家

レクチャラーとの提案・作業内容に関するディスカッション

9/6. thu

リサーチ・提案作業
（適宜休憩）

Lerture 7
「新しい公共」の広がりと課題
西田亮介 / 公共政策学者

レクチャラーとの提案・作業内容に関するディスカッション

9/7. fri

提案作業・プレゼンテーション
（適宜休憩）

Lerture 8
都市のリノベーション
馬場正尊 / 建築家

レクチャラーとの提案・作業内容に関するディスカッション

9/8. sat

プレゼンテーション作業

ゲストを招いた最終発表会

閉会式・懇親会

プロフィール



Lecturer 9/2.sun

吉村靖孝

建築家

1995年早稲田大学理工学部建築学科卒業。1997年早稲田大学大学院理工学研究科建築学専攻修士課程修了。文化庁派遣芸術家在外研修員としてMVRDV在籍を経て、2005年吉村靖孝建築設計事務所設立。早稲田大学・東京大学大学院・東京工業大学・芝浦工業大学非常勤講師。



Lecturer 9/3.mon

久保田裕之

家族社会学者
大阪大学大学院
人間科学研究科
助教

2001年早稲田大学第一文学部哲学科卒業。2010年大阪大学大学院人間科学研究科単位取得退学。ひょうご震災記念21世紀研究機構研究員を経て、大阪大学大学院人間科学研究科 助教。博士(人間科学)、神戸大学・関西学院大学・大阪教育大学ほか非常勤講師。



Lecturer 9/4.tue

中野豪雄

グラフィックデザイナー

2001年武蔵野美術大学造形学部視覚伝達デザイン学科卒業。株式会社勝井デザイン事務所に4年間在籍したのち、フリーランス。現在、株式会社中野デザイン事務所代表。武蔵野美術大学、多摩美術大学非常勤講師。ミームデザイン学校講師。



Lecturer 9/5.wed

成瀬友梨

建築家
東京大学大学院工学研究科
助教

2002年東京大学工学部建築学科卒業。2004年東京大学大学院工学系研究科 建築学専攻修士課程修了。2007年東京大学大学院工学研究科建築学専攻博士課程単位取得退学。成瀬友梨建築設計事務所を経て、2007年成瀬・猪熊建築設計事務所共同設立。2010年東京大学大学院 工学研究科 助教。



Lecturer 9/5.wed

猪熊純

建築家
首都大学東京都市環境学部
建築都市コース助教

2002年東京大学工学部建築学科卒業。2004年東京大学大学院工学系研究科建築学専攻修士課程修了。千葉学建築計画事務所を経て、2007年成瀬・猪熊建築設計事務所共同設立。2008年首都大学東京都市環境学部建築都市コース 助教。



Lecturer 9/6.thu

西田亮介

公共政策学者
立命館大学大学院
先端総合学術研究科
特別招聘准教授

2009年慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科修士課程修了。2012年慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科後期博士課程単位取得退学。慶應義塾大学政策・メディア研究科助教(有期・研究奨励II)、(独)中小企業基盤整備機構経営支援情報センターリサーチャーを経て、2012年立命館大学大学院先端総合学術研究科特別招聘准教授。東洋大学・学習院大学・デジタルハリウッド大学大学院非常勤講師。



Lecturer 9/7.fri

馬場正尊

建築家
Open A
東北芸術工科大学
准教授

1994年早稲田大学大学院理工学研究科建築学専攻修士課程修了。博報堂入社。1998年早稲田大学大学院理工学研究科建築学専攻博士課程。雑誌「A」編集長。2003年Open A設立。都市の空地を発見するサイト「東京R不動産」を開始。2009年東北芸術工科大学 准教授。



Joint Director

門脇耕三

建築学者
明治大学理工学部建築学科
専任講師

2000年東京都立大学工学部建築学科卒業。2001年東京都立大学大学院工学研究科建築学専攻修士課程修了。東京都立大学大学院助手、首都大学東京助教を経て、2012年明治大学理工学部建築学科専任講師。博士(工学)、関東学院大学非常勤講師。



Joint Director

南後由和

社会学者
明治大学
情報コミュニケーション学部
専任講師

2008年東京大学大学院 学際情報学府博士課程単位取得退学。東京大学大学院情報学環助教、特任講師を経て、2012年明治大学情報コミュニケーション学部 専任講師。桑沢デザイン研究所・早稲田大学非常勤講師。



Coordinator

中津秀之

ランドスケープアーキテクト
関東学院大学工学部
建築学科 准教授

1994年ハーバード大学大学院ランドスケープ学科 修了。関東学院大学工学部建築学科専任講師などを経て、2006年関東学院大学工学部建築学科准教授。2012年同大学工学部 建築学科学科長。有限会社サイトワークス主宰。



Adviser

鈴木伸治

都市デザイナー
横浜市立大学国際総合科学部
准教授

1992年京都大学工学部建築学科卒業。1994年東京大学大学院工学研究科都市工学専攻修士課程修了。東京大学大学院助手、関東学院大学専任講師、助教授を経て、2006年横浜市立大学国際総合科学部准教授。博士(工学)、東京大学非常勤講師。

都市構造の転換を促す「読み替え」の作法

門脇耕三

建築構法
明治大学専任講師

縮退都市での豊かな生活

yhcs2012の重要なキーワードである「都市の読み替え」の意義について、建築学的視点から述べることとしたい。

改めて指摘するまでもなく、日本は現在、縮退に向かっている。現在1億2千万人ほどの日本の人口は、2050年頃には1億人を割り込むと予測されている。首都圏に限っていえば、今後数十年は現在の人口規模が維持されると考えられているが、それを支えるのは65歳以上の老年人口であり、生産人口や年少人口は、やはり減少を続けることとなる。つまり、日本のおそらくほぼすべての都市は、これまでの拡大路線から、縮退路線への舵取りを余儀なくされる。

では、縮退する都市では何が起こるのだろうか。そこでは、マーケット規模の縮小、公共サービスの低下、未利用地や空き建物の増加など、様々な問題が生じると予想されている。一方で、交通渋滞や通勤ラッシュの緩和、一人あたりの床面積の増大など、都市生活をより豊かにしうる要素も見いだすことができる。つまり、いま求められているのは、「縮退時代ならではの豊かな都市生活」のビジョンを描くことなのだ。

成熟都市の構造転換

ところで、都市の縮退という現象は、成熟都市の様相の一つであると考えることができる。そして、東京や横浜といった都市は、縮退以外にも、成熟都市ならではの課題に直面している。

東京や横浜に限らず、19世紀から20世紀にかけて発展した都市は、それを工業化の推進によって成し遂げてきたという共通点がある。つまりこれらの都市では、重工業に対応した都市構造が整備されてきた。

しかしながら、社会が成熟するとともに、産業はより高次のものへと変貌を遂げる。たとえば、コンテンツ産業が勃興し、産業の主流を形成するに至る。この時、重工業に対応した都市は、構造転換を余儀なくされる。

都市構造を転換させるといっても、むろん、それを都市全体のスクラップ＆ビルドによって行うことは不可能だ。そもそも、産業構造の転換が求められるような成熟都市は、縮退のフェーズに入っていることが多く、都市インフラや建物の新規建設は敬遠される。この時、重要なキータームとして浮上してくるのが、「都市の読み替え」である。

世界的に見られる「都市の読み替え」

重工業に対応して発展してきた都市は、工業製品やその原料の輸送、あるいは居住地から勤務地への労働者の移動を担う都市インフラを発達させている。しかし、重工業が衰退すれば当然、物流のための都市インフラは不要となるか、規模の縮小が必要となる。直接的に製品を扱う職種ではない限り、情報技術の発達は通勤の意味を希薄化させるから、労働者の移動のためのインフラについても、同様のことが起こるだろう。しかし世界に目を向ければ、このような都市インフラを巧みに読み替えた事例を、数多く見つけることができる。

たとえば、廃線となった高架貨物線を緑道へと用途転換した、ニューヨークの「ハイライン」は、その好例である。かつては倉庫や工場を直接結び、物流を担っていたこの貨物線は、現在では200種類以上の植物が植えられ、ベンチがしつらえられ、日常的にさまざまなインスタレーションや展示が行われており、癒しと知的な刺激を提供する都市公園へと変貌を遂げている。ここでは、工業的なインフラが、知的創造のためのインフラとして読み替えられてるというわけだ。日本にも、役目を終えた物流イ

ンフラが、知的な刺激を産出するインフラとして読み替えられた事例は多数存在しており、たとえば、廃止された運河と倉庫群をアートのための空間として読み替えた「中川運河キャナルアート」などがその例である。これらの事例に共通しているのは、巨大で単一機能的なインフラが、身体的なスケールをもった多機能的な場所へと読み替えられてることであり、これも知的な刺激を増大させようとすることの表れであると見ることができるだろう。

仕事の場と居住の場がゾーニングにより区画され、明確に機能分担されていた都市そのものも、現在ではその分担が融解しつつある。都心の老朽化したオフィスビルを集合住宅へとコンバージョンした事例や、郊外の団地をSOHOやシェアハウスへと改修した事例も、ハイラインなどと同じく、工業都市からの構造転換への要請に対応し、読み替えられた建物だと捉えることができる。ここでは、「業務地区」や「住宅地」といった、空間的機能分担の瓦解が起きている。

「機能分担」は極めて20世紀的な概念であるが、それを無効化しようとするこれらの例にとどまらず、現在の都市におけるもっとも先端的な試みの多くは、「都市の構造転換に伴う既存ストックの読み替え」という観点からの説明が可能である。

群を扱う思考へ

さて、既に指摘したとおり、都市の縮退は、成熟した都市に認められることが多い。したがって、「縮退時代ならではの豊かな都市な生活」を、都市構造の転換によって実現するためには、都市を構成するインフラや建物ストックを、適切に読み替えていくことが重要となるわけだ。

このとき、読み替えの対象となるストックの一つ一つは、決して大きなものではないだろう。しかし、だからこそ

そこで要請されるのは、ストックを「群」として把握し、これらがネットワークする関係の中に、新たな都市構造を見出していく思考である。ここで、建物をそれ単体で機能完結した存在として捉える態度は、もはや有効ではない。建物が周辺と機能的な連担や補完をすることが、読み替えの前提となるのである。このような態度に基づいて読み替えられた建物は、周辺のコンテクストに深く根ざしながら、その境界が定まらない、開放的なものへと姿を変えることだろう。

　では、読み替えられた建物や都市インフラがふたたび集合し、新たな構造へと書き換えられた都市や、そこで生まれるコミュニティの姿は、どのようなものとなるのだろうか。yhcs2012は、この新しい都市の様態を描くための、最初の思考実験なのである。

リサーチと設計をつなぐインフォグラフィックス

南後由和

社会学
明治大学専任講師

ポジティヴな縮退

人口減少、税収の低下、空き家の増加、インフラの老朽化などの問題を抱える「縮退する都市」においては、いかに建物を「作る」かのみならず、いかに「使う」かという発想が求められている。今や、オフィスが住宅として、学校が美術館として書き替えられるなどの事例は枚挙にいとまがない。ビルディングタイプと用途の1対1の対応関係は崩れ、建物の構えからその用途を想像することは難しくなっている。

yhcs2012では、[1]逸脱的な使われ方をしている既存の建物を複数発見する、[2]対象エリアが抱える問題やポテンシャルについてのデータを収集する、[3]今後再編成、再配置されるべきプログラムや新しいビルディングタイプの提案をする、以上をとおして、対象エリアの固有性を増幅するポジティヴな「縮退する都市」のヴィジョンを提示することを趣旨に掲げた。

他方で、「縮退する都市」においては、建てることの前提を問い直す必要がある以上、設計以前と以後を越境するリサーチがますます重要性を帯びてくる。そこでyhcs2012では、リサーチと設計のあいだを媒介する装置として、インフォグラフィックスに着目した。最終的なアウトプットを模型や図面ではなくインフォグラフィックスにしたのは、人文社会系の参加学生もそれほど障壁を感じずにアウトプットの作業まで参加できると考えたからでもある。

視点を変換するインフォグラフィックス

インフォグラフィックスとは、単にデータを美しく見せるプレゼンのための装飾ではない。インフォグラフィックスは、データを並列、比較、重ね合わせるという編集のプロセスにおいて新たな問題の発見や気づきを促す。それは、視

点の変換や新しいものさしなのだ。

yhcs2012では、横浜のAチーム・野毛地区、Bチーム・伊勢佐木地区、Cチーム・関内・馬車道地区、Dチーム・みなとみらい地区がそれぞれに抱える問題やポテンシャルをあぶり出すために、考現学的なフィールドワーク（横浜コミュニティ・サイクルのBaybikeを活用）と統計・白書の各種データの分析をハイブリッドしながらリサーチを進めた。官庁や役所が刊行する統計・白書は豊かな資源であるが、データの垂れ流し状態になっていると言っても過言ではなく、それらの有用性が十分に発揮されているとは言い難い。建物同様、それらの統計・白書にもいかに「使う」かという発想が求められる。

Aチーム・野毛地区は、R18指定の店が並ぶ歓楽街の下町と文教地区の山手とで、建物の用途の違いは見られるが、世帯数や核家族の数では差異がないことを発見した。これは統計・白書の当該データをマッピングすることで得られた気づきである。下町にも子どもを持つ家族が多数居住しているという発見から、下町と山手のあいだに新たな関係性を紡ぐライティングや、空地をマッピングすることで浮かび上がった空間の型に固有のプログラムの提案を導き出している。

Bチーム・伊勢佐木地区は、空地、空室、抜け道という3つのヴォイドを重ね合わせてマッピングすることで、伊勢佐木地区の新たな空間の型を発見している。その空間の型に挿入するプログラムには、考現学的なフィールドワークを駆使して明らかにした自動販売機の配置や値段の分布、通行人の量や属性から推測される利用者像に適合したプログラムを提案している。

Cチーム・関内・馬車道地区は、空室の増加や設備の老朽化からオフィス地区としての競争力が低下しているという問題と、当該地区のオフィスの顧客が市内の近距離内にコンパクトに集中していることを統計・白書から発

見したうえで、この地区で働く人と顧客を横断するプレイヤーとして子どもに着目するという発想を得た。一方で、映像や写真での記録による定点観測を駆使して、平日昼夜、休日昼夜とでアクティヴィティの違いがあること、いわば時間的ゾーニングとでも呼ぶべき空間の型を発見した。それらの空間の型に、子持ちの共働きの夫婦が職住近接で住みやすい空間とプログラムを挿入することで、オフィス地区としてのポテンシャルを高める提案になっている。

Dチーム・みなとみらい地区は、法、規範、市場、アーキテクチャという4つの指標にもとづき作成した、入れる場所／入れない場所の地図の上に、考現学的なフィールドワークによってマッピングした人の属性、インフラの分布、座れる場所などの地図を重ね合わせることで浮かび上がらせた空間の型に、みなとみならいへ訪れる人のアクセス・スケールの違いであるS、M、L、XLに対応したプログラムを提案している。

ネットワークとしての都市の編集

以上のように、4つの班に共通している点は、対象エリアの建物・インフラの使われ方、統計・白書のデータ、プレイヤーのアクティヴィティなどを可視化したインフォグラフィックスを作成することで何らかの「空間の型」を発見し、そこにコンテンツを上書きしていくという手続きをとっているということだ。リサーチで得た素材をインフォグラフィックス化する作業を通じて、設計につながるヒントを得ている。

これまで既存の建物の転用といえば、点としての対処療法的なものにとどまりがちであったが、いずれの班も点ではなく、ネットワークとして都市を読み替え、書き替えていくというスタンスをとっているのも特筆すべき点であろう。社会の変化の速度と、建築の変化の速度は異なる。ならば、建築の慣性や冗長性を活かした時間的変移をマネジメントし、それらの変移を群としてネットワーク的

に捉えることで都市を編集していこうというわけだ。また、建築の空間的提案と、その空間を運営する主体と方法をセットで提案するよう努めているのも特徴といえる。

YHCS2012の読み替え・書き替え

計8日間のyhcs2012では、家族社会学者の久保田裕之氏、公共政策学者の西田亮介氏、建築家の吉村靖孝氏、成瀬友梨＋猪熊純氏、馬場正尊氏をゲストとしてお招きした。毎日、人文社会系の研究者と建築家のゲストに交互にレクチャーと講評をお願いし、リサーチのヒントや方向づけをいただきながら、ワークショップを進めていった。ゲストの方々のレクチャーと講評が大変充実しており、その記録集をまとめるだけでも十分価値あるものになっただろう。また、インフォグラフィックスを軸に据えるにあたって、グラフィック・デザイナーの中野豪雄氏にご尽力いただき、インフォグラフィックスのワークショップ・イン・ワークショップを実施できたことも有意義だった。

中間講評会では、横浜市都市デザイン室の中野創氏、桂有生氏から現場目線での実践的アドバイスを頂戴した。最終講評会では、人文社会系のゲストとして都市社会学者の町村敬志氏、評論家の宇野常寛氏、建築家のゲストとして西沢大良氏、藤原徹平氏にお越しいただき、今後の発展可能性を照らし出す刺激的なご指摘の数々を頂戴した。ご協力いただいたゲストの皆さんはもちろん、yhcs2012のディレクターという貴重な機会を与えて下さった中津秀之先生、鈴木伸治先生、そして運営の全面的なサポートしていただいたYCCの中川ちあき氏、岩井桃子氏をはじめとするスタッフの皆さんにこの場を借りて深く感謝を申し上げるしだいです。そして、ディレクターを一緒に務めた門脇耕三氏との協働も建築的思考の鮮やかさを感得する大変実りあるものだった。今後

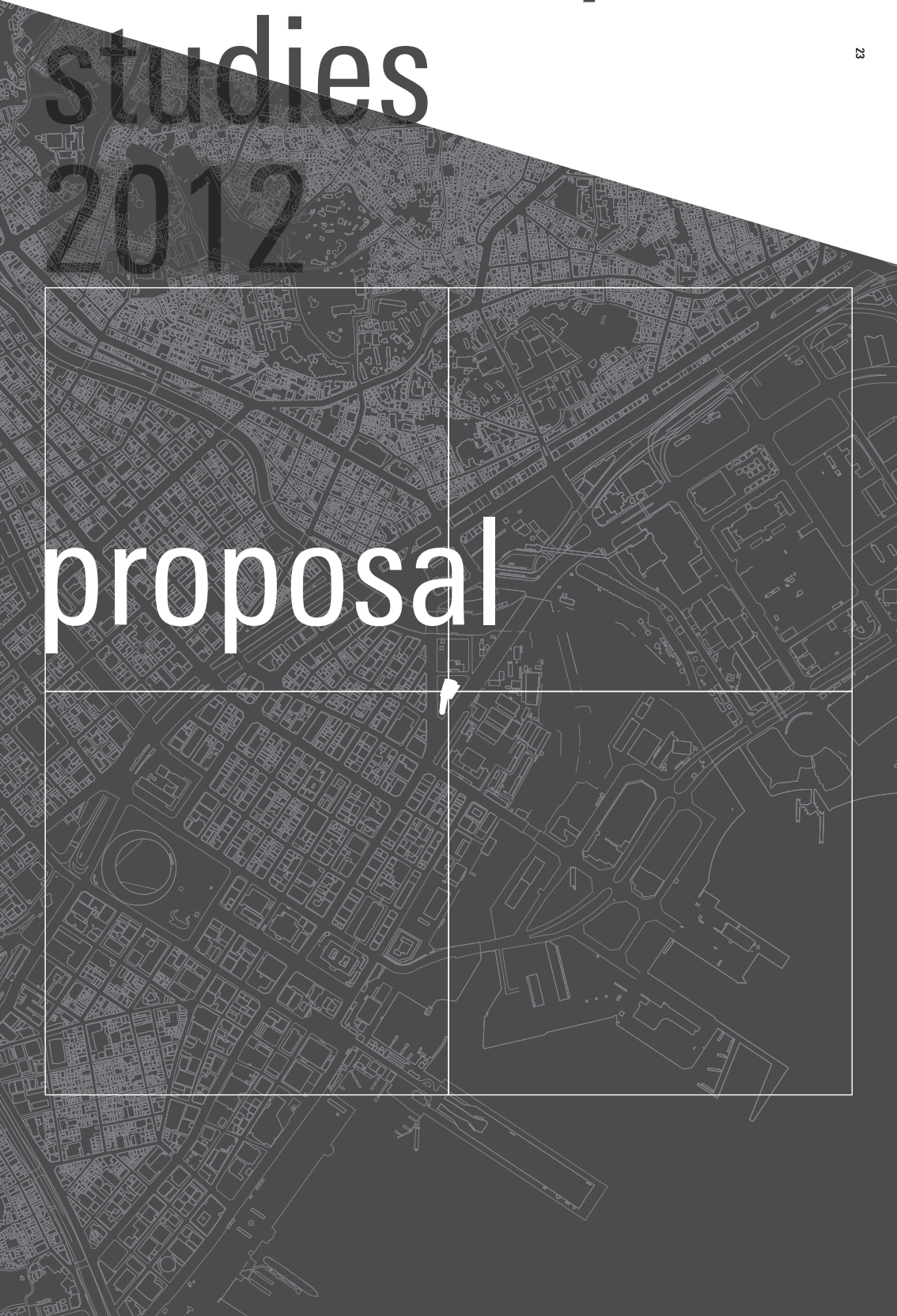
も協働関係を持続すべく画策中である。

最後に、yhcs2012参加学生のワークショップに取り組む、並々ならぬ熱気に圧倒されたことを付け加えておきたい。建築系のみならず、法学、経済学、文化人類学、情報コミュニケーション学など多岐に渡る学部、大学院の学生が参加し、学際色豊かなワークショップとなった。人文社会系の学生にとっては、様々な事象を統合して形にしていく建築学のアプローチに刺激を受けただろうし、建築系の学生にとっては、当たり前のものと思われている家族、公共、空間のあり方を解きほぐし、斜めから捉え返していく人文社会系のアプローチは新鮮に映ったことだろう。参加学生が、yhcs2012で得た知見をそれぞれのフィールドで読み替え、書き替えていってくれることを期待している。

yokohama harbor city

studies 2012

proposal



yokohama harbor city

studies 2012

A team

岡佑亮 / 奈雲政人 / 黒川明未 / 竹生裕喜 / 根市拓 / 藤枝大 / 栗林新太

野毛地区には、野毛山と呼ばれる丘陵地があり、古くから閑静な高級住宅地として発達してきた。
一方、大岡川沿いにひろがる平坦な低地には、飲食店や風俗店などが建ち並ぶ。つまり野毛地区には、
地形に対応した山の手／下町的な構造を認めることができる。
しかし、統計データの丁寧な分析からAチームが発見したのは、繁華街が発達している下町的エリアにも、
子どもをもつ家族が、野毛山に遜色なく居住しているという事実である。丘陵地の住宅街と、
低地にひろがる繁華街というこの地区の特性から、われわれが抱くこの地区の住民のイメージ、
つまり子どもは丘陵地の方にこそ多く住んでいるだろうという想像は、必ずしも正しくないというわけだ。
そこでAチームは、「ソシオランドスケープ」と名付けたインフォグラフィクスによって、
地形が想起させるこの地区のイメージと、実態とのギャップを浮かび上がらせる。そこから見えてきたのは、
低地における生活支援施設の不足であり、Aチームは、既存建物と空地の付置を丹念に読み解き、
それらの複合体を、あたかも一体の生活支援施設であるかのように読み替えていく——
建物や敷地の境界を越えて、街はどのように再編されるのか。その展望を描く。

まちの風景

対象エリアをまちの風景として歩行者目線から分析したところ、桜木町駅から南に伸びる幹線道路を境として大きく2分されていた。西側には急勾配の坂が多く見られ、その上には住宅地や学校、公立図書館等の文教施設が広がる山手エリア、東側を飲食店街や風俗店街の残る下町エリアとここでは便宜的に区分した



山手エリア


坂


住宅


文教施設

下町エリア


風俗店街

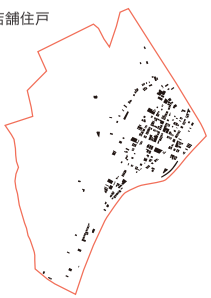

飲屋街

analysis: mapping

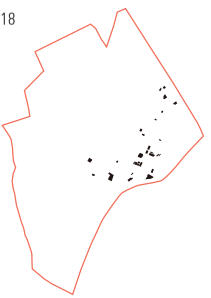
対象エリアの分析1 / マッピングによって見えてきたもの

対象エリア内の建物を住宅、店舗兼住宅、文教施設、風俗店の用途別に抽出したところ、住宅はエリア全体に広がっているものの、規模の大きな集合住宅は山手エリアに、1階に店舗を兼ねる住宅は下町エリアへ、また文教施設、風俗店はそれぞれ山手エリア、下町エリアに集中していることが確認できた。

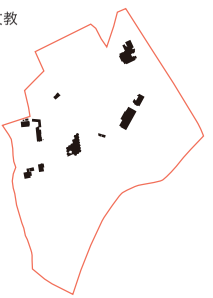
店舗住戸



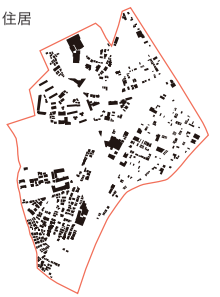
R-18



文教



住居

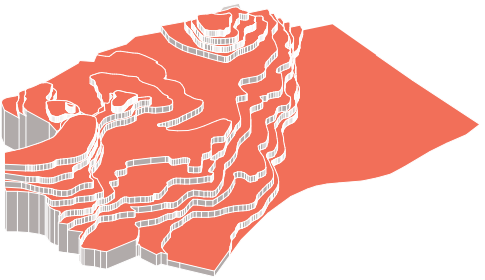


analysis: socio-landscape

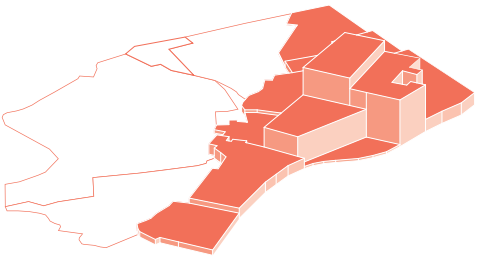
対象エリアの分析2 / ソシオランドスケープによって見えてきたもの

高低差が特徴的な対象エリアの地形図をヒントに、先の建物用途や人口、世帯数等の密度を町別にグラフ化したものをソシオランドスケープ（社会的地形図）とした。これによって、人口や子供がいる家庭の密度は建物用途ほど傾きが大きくはなく、都市の構えとプレイヤーが一致していないことがわかった。

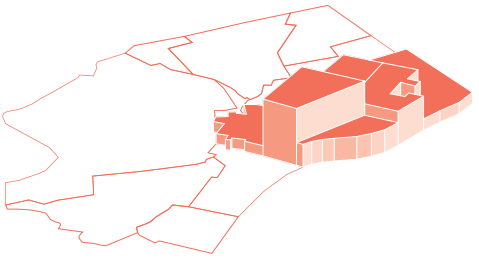
地形



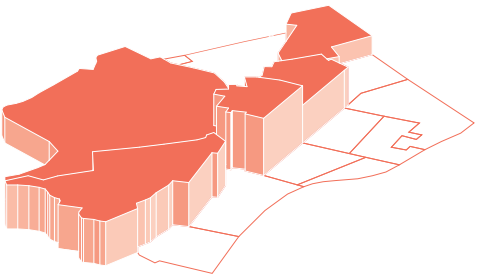
店舗付き住居(戸／m^2)



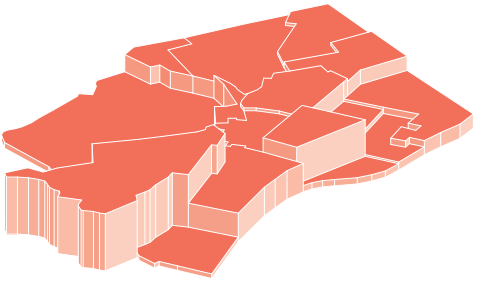
R-18(軒／m^2)



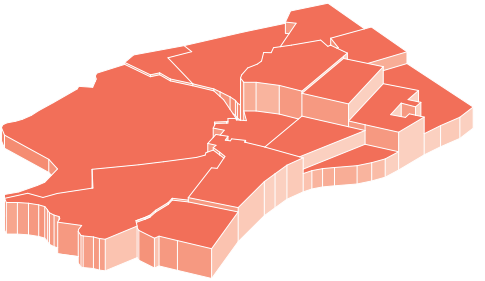
文教(棟／m^2)



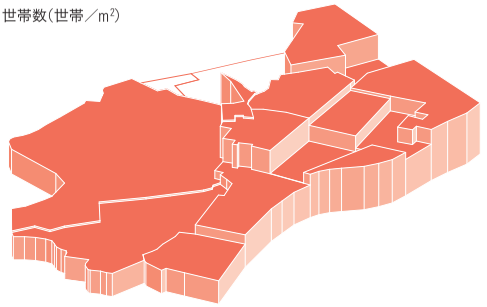
住宅(戸／m^2)



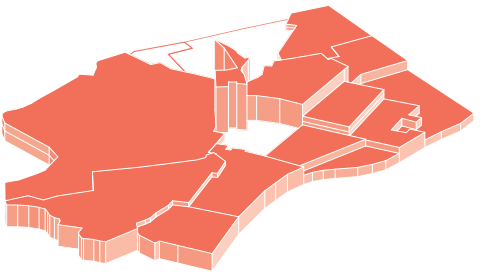
人口密度(人／km^2)



世帯数(世帯／m^2)

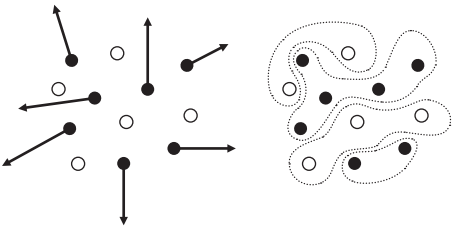


核家族(家族／m^2)



緩やかな住み分けへ

上に挙げたこの対象エリアのプレイヤーとは、下町の飲食店で働く人、山手に住む大人、下町に住む親子、下町の飲み屋や風俗店に訪れる人と様々で、プレイヤーによって求めているコミュニケーションの質も異なる。そうした人々を「都市の書き換え」によって緩やかな住み分けを実現することはできないだろうか。



research: lighting



対象エリアの分析3 / ライティングによって見えてきたもの

ここで、下町エリアに焦点を当てて、屋外に並ぶ照明の調査を行ったところ、風俗店街も存在するものの、照明によってその印象を軽減する通りを確認した。それと同時にプレイヤーが主に利用する道を導き出し(1)、また風俗店を再びマッピングし(2)、それらが面する道を1から取り除く(3)。更に、屋外駐車場·空地と空家の情報も加え(4)、この下町エリアの都市構造の中に空地·空家と道を一体として建築空間の形式として読み替え、3つのプロトタイプを見出した。



1 現状の証明の配置



2 R-18店







3 風俗店を通らない道を確認する



4 空き地と通りの関係性から計画していく

research: vacant lot / vacant room

空地·空家の現状

先に空地·空家について少し触れたが、この下町エリアには多くの空地や空家が見られた。人口が減少し、縮退していく日本社会の中でこの下町エリアも例外ではなく、少子高齢化が見受けられ、かつてそこに住んでいた人々が亡くなる、あるいは他の地域へ移った後に残された空家は新たな入居者や店舗を迎えることなくそのままの形で残されている。

空き地



必要のなくなった土地は駐車場となり、野毛地区に多く点在している。

空き家



既存の建物に新たに店舗が入る事はなく、そのままの状態で残っている。

空地の多くはコインパーキングとして機能しているものの、
その実約半数は活用されることなく空間を持て余しているのが現状である。

1台の自動車が駐車できる駐車場
356

実際に使用されている駐車場
119

駐車場の使用率
47.5%



proposal: noge area

3つの読み替え

照明と空地から見出した3つのプロトタイプをそれぞれA:大空間型、B:中庭型、C:分棟型として、異なるプレイヤーたちに合わせた公共空間の可能性を提示する。具体的には、Aはパブリックな空間として山手エリア、下町エリアのプレイヤー両者に境なく集まることができ、祝祭の場としても機能する。Bでは空地が道を挟み、それらを一体としてセミパブリックの役割を与え、Cはゲーティッドコミュニティを形成することで下町エリアのプレイヤーのプライベートな空間を作り出す。

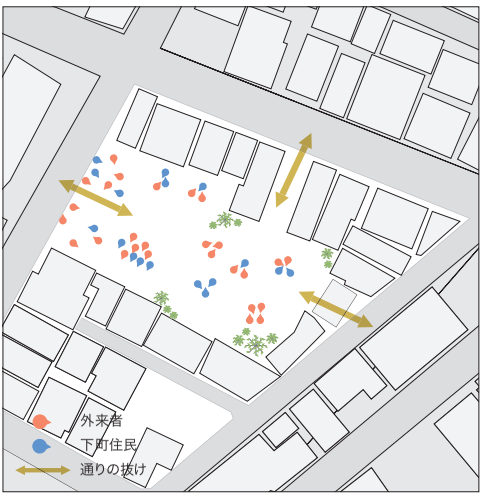


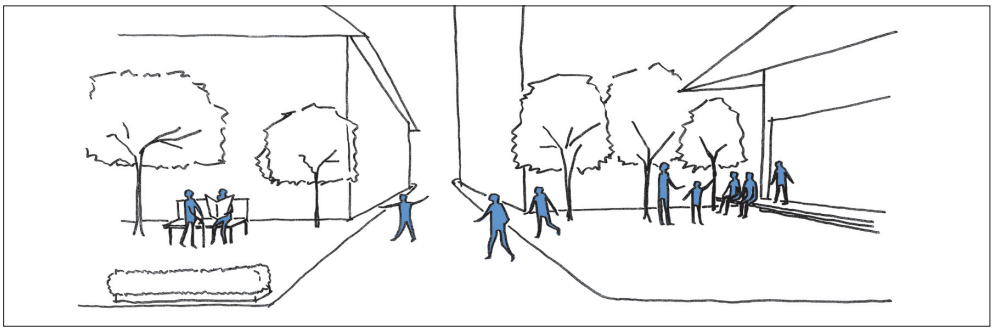


エリアA:大空間型

山の手、下町エリア両者に境がなく、集まれるお祭り的なことができる空間









エリアB:中庭型

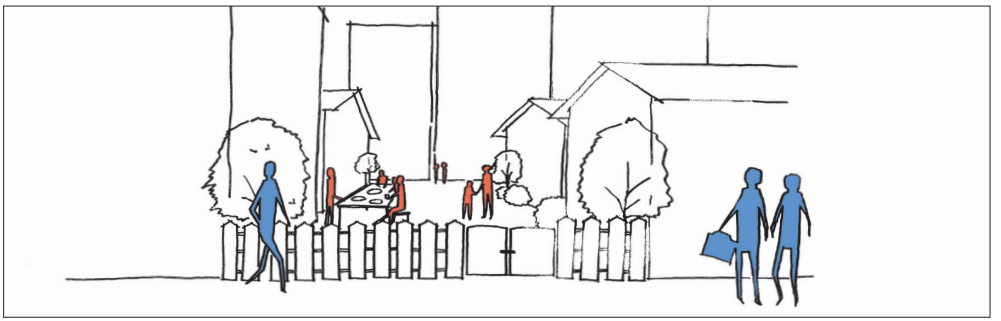
地域施設が道を挟んで
建っているような空間。
空き地を介した複合的な
用途ができる。

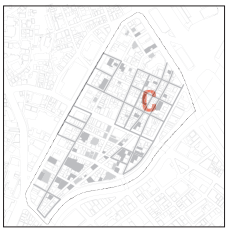












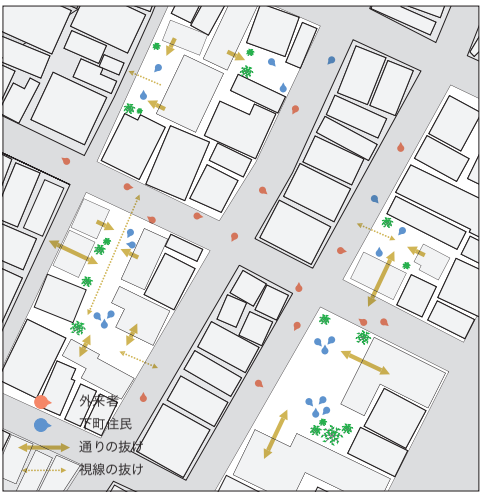
エリアC:分棟型

多くの建物が接している空間を
ゲーティッドコミュニティ形式にして、
密なセミパブリック空間をつくる。









先ほど、空き地を読み替える事で公共性に濃淡をつけた3パターンの土地利用を提案した。山手にはある公共スペースが、野毛には欠けていた。土地の読み替えによって、野毛にも公共性のある空間を創造出来た。「公共」という言葉は強い。どこにでも公共性のある空間を現出させることに抵抗感のある人もいるだろう。

今回私達は、3つの濃淡を異にする公共性のある空間を想定してみせた。

日本は縮退の時代をすすんでいる。そのなかで、その土地にあった公共性をつくりだすことが、この発表のあとでは考えうるようになっているのではないか。

縮退の時代を悲観的にのみ捉えるのではなく、読み替えによって可能性が広がると考えてみたい。



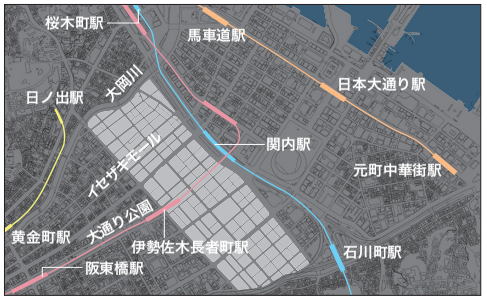
yokohama harbor city

studies 2012

B team

宇野達也 / 澤谷理裕 / 室橋祐貴 / 宮島真吾 / 柴崎康介 / 角田彰利

伊勢佐木町周辺の地区には、買い物客でにぎわうイセザキモール、コリアンタウン、
風俗街、ドヤ街など、特徴あるさまざまな街区が集まっている。北西から南東に伸びる通りを歩けば、
数ブロックごとに大きく雰囲気を変えるこの街に、誰しもが魅力を感じずにはいられないだろう。
その体験は、さながら細かくカット割りされたフィルムを見ているかのようだ。
それぞれの街区は、独自の経緯をたどって形成されてきたのであり、この体験は、
異なる街区がストライプ状に並んでいることからもたらされる。
またこの地区は、全体としても高いポテンシャルを持っており、統計データは、
居住人口や観光客数が年々増加していることを示している。
一方で、統計データは、観光客数は増えているのにも関わらず、商品の年間販売額は減少している事実も
突きつける。Bチームは、この理由が、それぞれの街区が競合していることにあると推測する。
街区の独自性を保ちながらも、それらの自由な行き来を可能とするため、
Bチームはそれぞれの街区を結ぶ抜け道状の空間に着目した。この抜け道によって、
意外なかたちで接続された街区どうしのはざまには、この地区には今までなかった、
新たなコンテンツが挿入されていく——



軸によって分断された街

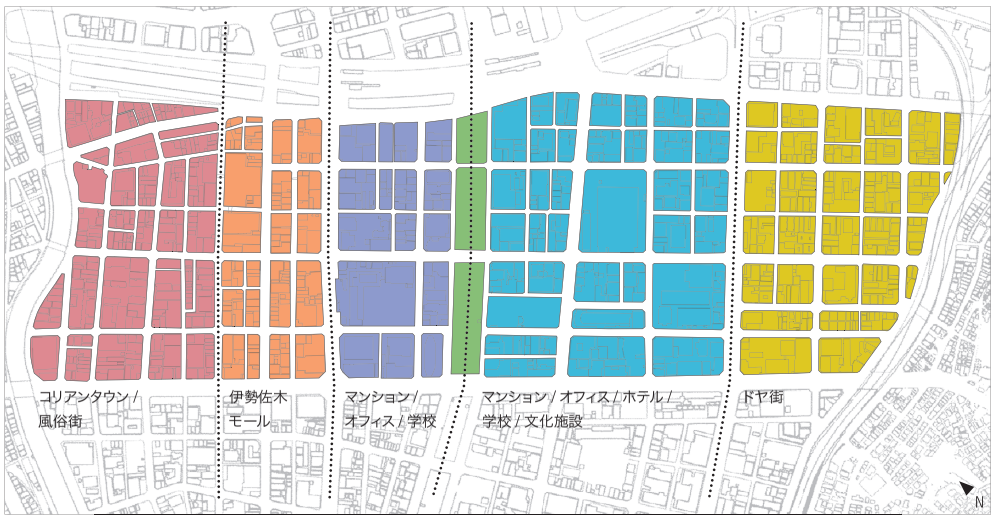
担当エリアの伊勢佐木地区は、関内地区とJR線（青の線路）を挟むように位置している。また、地区内に拡大して見ると、幹線道路や大岡川等の南西から北東への強い軸があり、「コリアンタウン・風俗街」「イセザキモール」「マンション・オフィス・学校」「公共施設」「ドヤ街」というように街区ごとに性格が分かれている。この2つの要因によって、街の特性が強化されている。


コリアンタウン / 風俗街


伊勢佐木モール


大通り公園

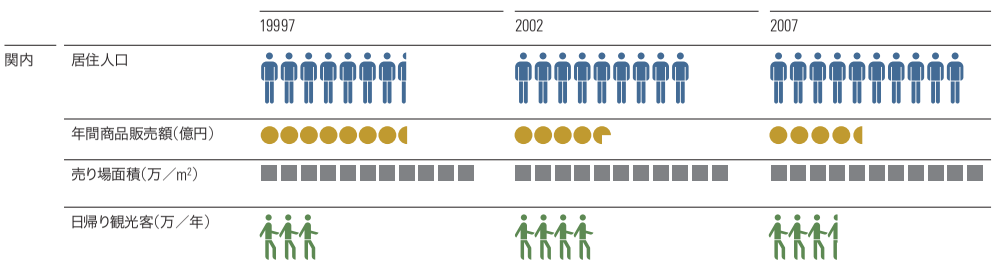

ドヤ街

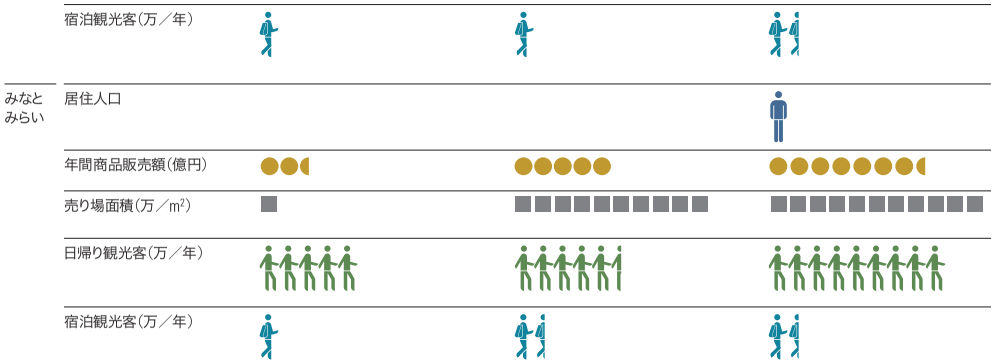


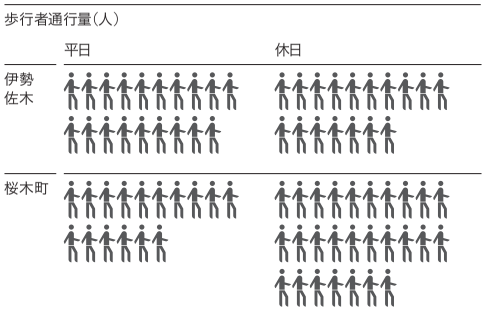
research: character

交じり合わない街

平日の桜木町と通行量を比較してもひけをとらず、街としてのポテンシャルを持っている。しかし、街に強い特性があることで、ある街区に来た人が他の街区に流れて行くことが無く、お互いに交じり合わない。また表通りのチェーン店化により、この土地の固有性が失われて地域間競争力としての価値が減少している。









表通りのチェーン店化。地域間競争力としての減少が懸念される。

fieldwork: 3 voids

3つのヴォイド

フィールドワークにより「空き地·空室·抜け」の3つのヴォイドを発見した。地区全体を通して、空き地と空室が目立ち、抜けの存在も明らかになった。抜け道はドヤ街やコリアンタウンなどに多く存在し、地図に載っていない道として利用されている。



空き地(駐車場)



空室

抜け道に読み替え可能な場所



抜け道



簡易宿泊施設の中廊下



川沿い飲み屋の2階



マンションの船着き場

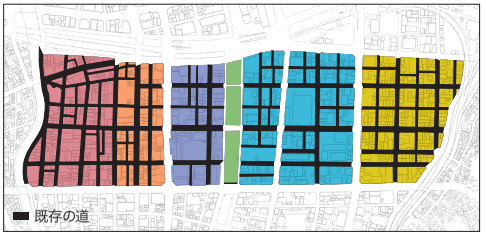


2階への荷揚げ場

proposal: fase1

3つのヴォイドのマッピング

図はそれぞれ空き地·空き家·抜けのマッピングである。ヴォイドはエリア全域に点在していることが分かる。地域間競争力を上げるために、3つのヴォイドに対しこのエリアの固有性を表出する。



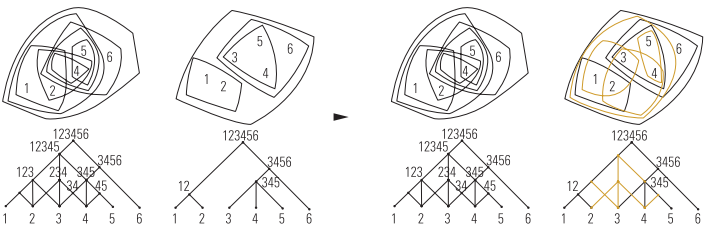








図はセミラティス構造とツリー構造の比較である。ツリー型の都市構造である伊勢佐木町エリアの3つのヴォイドにパスを通しこのエリアの固有性を拾っていくことで、セミラティスの都市構造として読み替えることができる。青い線で囲まれたエリアが3つのヴォイドによってつくられたパスである。

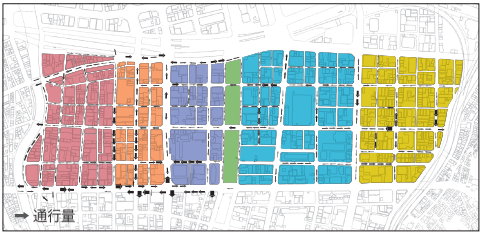


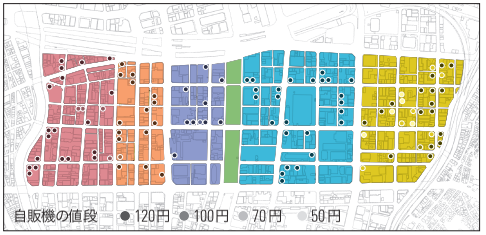
proposal: fase2

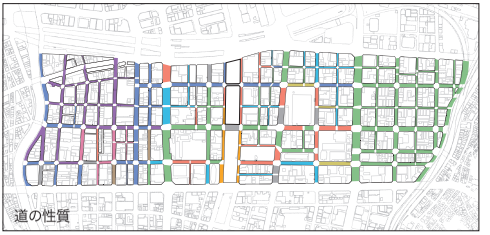
エリアの性質

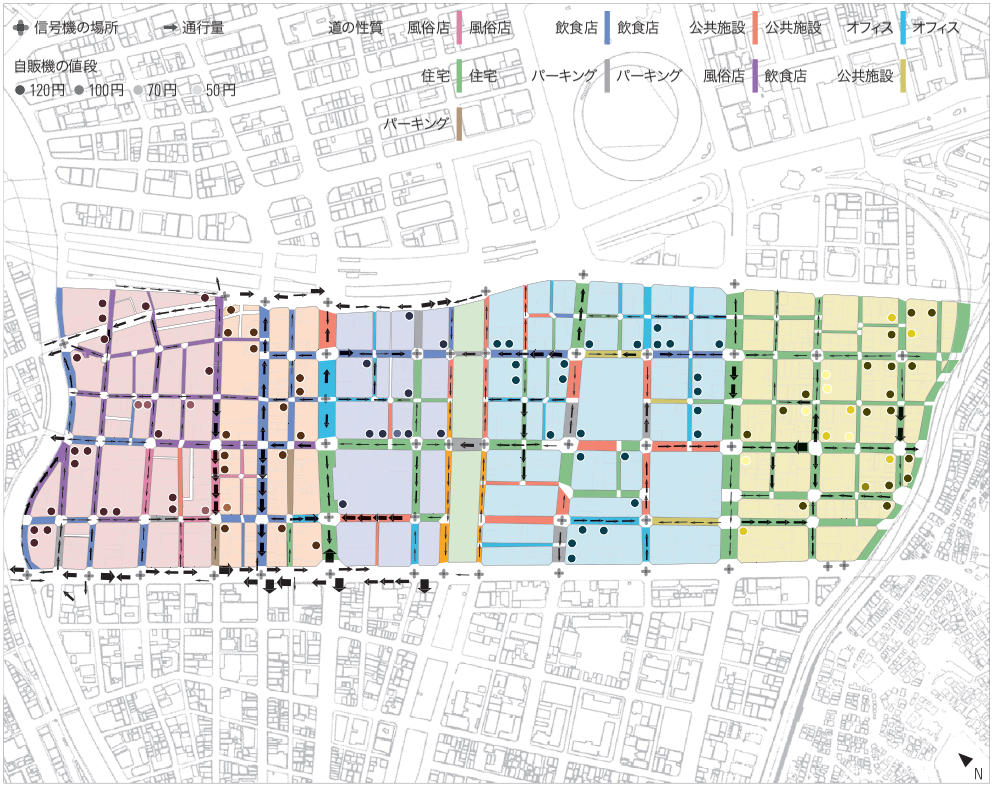
図はそれぞれ伊勢佐木町の信号機の場所·通行量·自販機の値段·道の性質を示したものである。さらにそれらを重ねあわせたものを(大きい)図に示す。ここからわかることは、地区ごとに性質が異なっていることである。ここから提案を決定する。



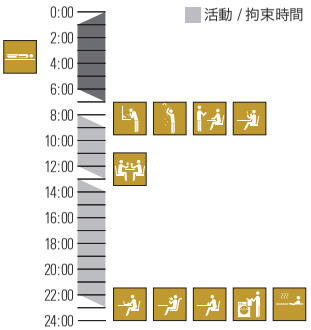




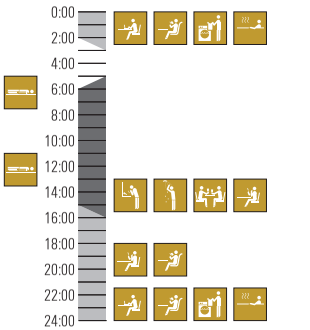




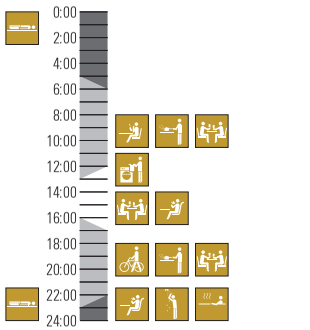
在留外国人



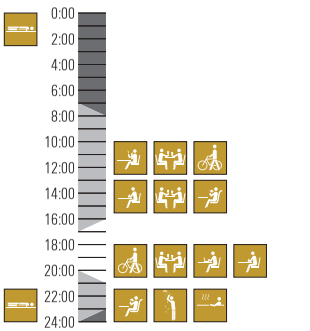
風俗嬢



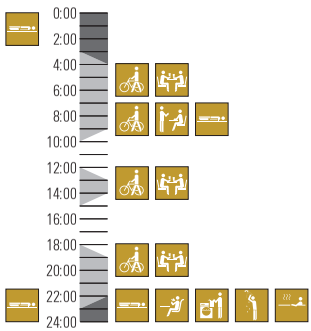
主婦



学生



ドヤ街



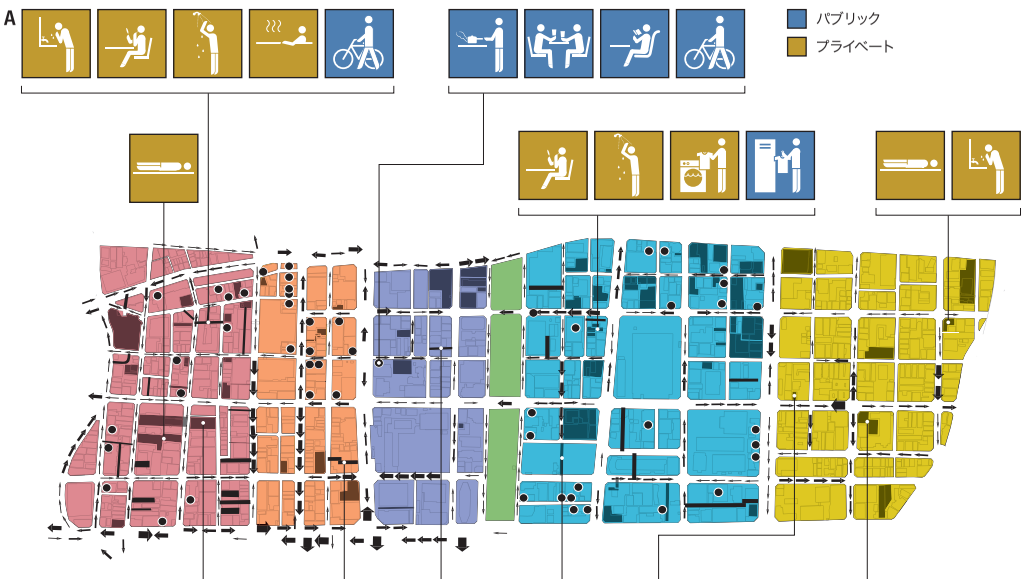
それぞれの生活リズム

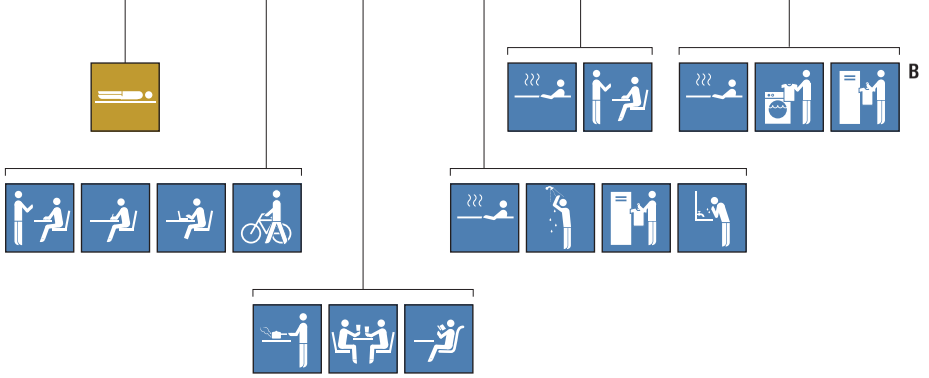
提案エリアに住む人々の生活リズムを示したものである。また、時間によってどのような行動をとっているのかをアイコンによって示す。生活行動が重なる部分は交流のスペースとして利用し、重なっていない部分は時間によって異なる使い方ができる。

proposal: isezaki area

都市の書き替え

以上のことから私たちの提案は、空室・空き地・抜け道を使うことによって、建物の読み替えを行ない、生活の一部を街のコンテンツとすることを提案する。人々の生活行動が重なっている部分（パブリック）は青、重なっていない部分（プライベート）が黄土色のアイコンでそれぞれ示した。それぞれ地区の特性により導き出される必要な機能を配置する。





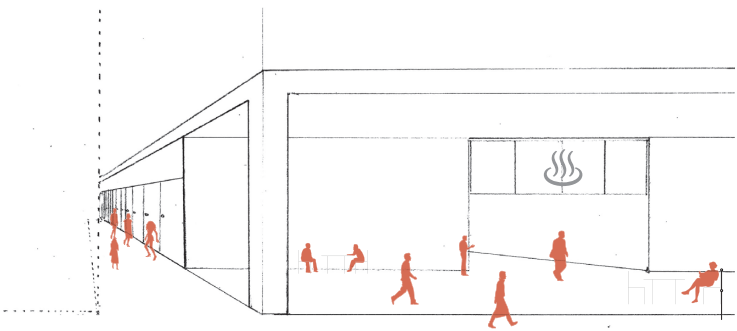
このアイコンはそれぞれ洗面台、化粧室、シャワー室、風呂場、駐輪場を表している。
ヴォイドにこれらの機能を配置することで、場所を共有し新たな交流が発生する。
ヴォイド周囲の性質が「風俗街」なので、プライベートな空間も守っている。

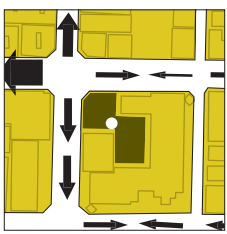




このアイコンはそれぞれ風呂場、コインランドリー、レンタルクロークを表している。
ヴォイドにこれらの機能を配置する。ヴォイド周囲の性質が「ドヤ街」なので、
お風呂場を大浴場（パブリック）にすることで、場所を共有し新たな交流が発生する。







伊勢佐木エリアに点在する3つのヴォイドを読み替えて、街に住む人々の生活行動に沿ったコンテンツを提案をし、都市構造の書き換えを行なった。
各街区の特徴が表出することにより、それぞれの特徴がより強化される。
さらに、街としてのポテンシャルが十分に活かされ、地域間競争力が高まる。既存の都市構造を見直しセミラティス化していくことで人々の行動範囲を広めるきっかけをつくる。
これらの施設は地区内の住民に対し利用カードを発行する。入室する際には、そのカードを通すことで利用できる。外から来た人は、お金を払うことで利用可能である。
運営はNPOまたは市が行ない、日雇い労働者を雇用することで人員をまかなう。

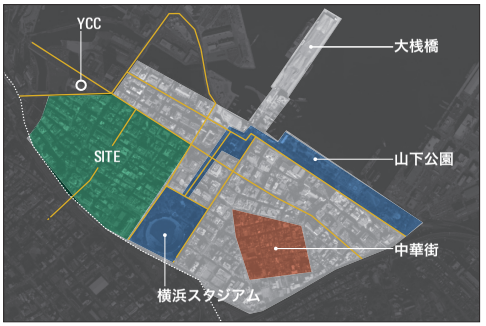

Yokohama
harbor city

studies 2012

C team

村田陽介 / 藤田一真 / 上田将也 / 今川智貴 / 柴侑里 / 曽我明宏

関内・馬車道地区は、横浜の業務中心として栄えてきた、オフィス街である。
しかし、みなとみらい地区に次々と建設されたメガフロア型のオフィスビルによって、
業務地区としての競争力を失いつつあり、古くなったオフィスビルが、マンションに建て替えられることも多い。
つまりオフィスと住宅の混在化が、ゆるやかに進行しつつある。そしてCチームが着目したのは、
オフィスと住宅を媒介するプレイヤー、つまり「子ども」である。
フットプリントがそれほど大きくはない建物が主流を占めるこの地区のオフィスビルには、
法律事務所やデザイン事務所など、自営業的な企業が入居している割合が高いという。
つまり託児のニーズが高い。一方、数を増やしつつあるマンションには、共働き世帯の入居が目立つ。
この地区に増えはじめた空室を利用して、オフィスと住宅のはざまに子どもを主役とする機能を挿入していく——
これがCチームの基本戦略である。
平日の昼夜、休日の昼夜という、異なるモードにおける街の使われ方を詳細に分析し、働くこと、
子育てすることを両立させる街のあり方を描く。







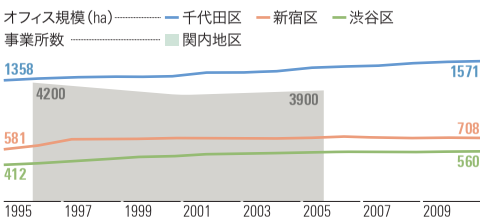
はじめに

関内地区は港湾都市「横浜」を古くから支えてきた横浜の中心で、港湾機能が衰退した現在でもたくさんの企業オフィスや県庁をはじめとした公的施設を有している。また、山下公園や中華街、歴史的価値のある建物も複数あり、多くの観光客が訪れる地区である。

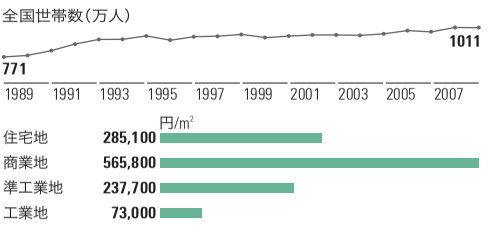
research: issue and Potential

関内地区の現状

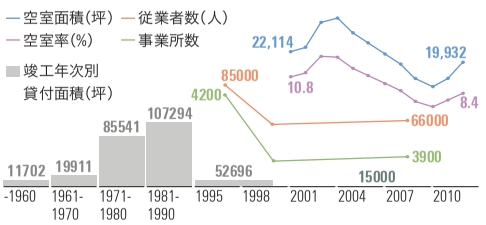
近年は横浜駅周辺の発展MM21地区の開発で関内地区の事業所が減少し空室が増えている。また建物の老朽化や取り壊しによる空地の駐車場化・タワーマンション建設が起きている。しかし、依然としてオフィス街として地位が高く公的機関や大学等の研究機関が点在し、住民が増加し続けていることから官民連携や異業・同業種交流、職住近接の新しい可能性があるのではないか。



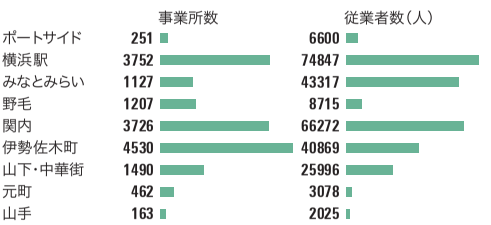
日本の都市部・駅前地域におけるオフィスの減少。リーマンショック以降オフィスは減っている一方で、競争力の高いオフィス地区が存在する。



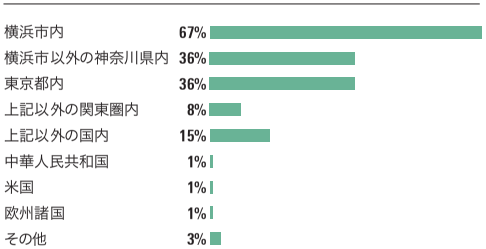
衰退したオフィス地域に入ってくるのは駐車場やタワーマンションなどの住機能。一方、そのような地域では依然として地価が高いので共働きの家族層が多い



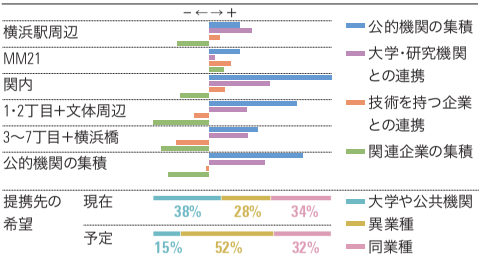
衰退する関内地区のオフィス。
オフィス数は減少し、設備の老朽化が問題となっている。



オフィス街としてのポテンシャル・従業者数。
事務所数も従業者数も多い。



オフィス街としてのポテンシャル・主要顧客の立地場所。主要顧客が近くに多い。

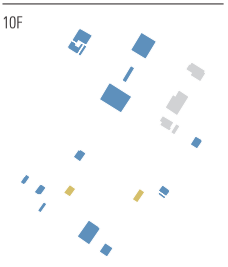


同業種・異業種交流の可能性。

analysis: spatial use

分析1:機能のストック調査、主体の設定

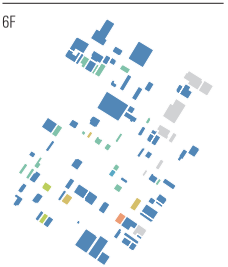
関内駅北の、ペンシルビルが立ち並び観光地と住宅地に隣接しているオフィス街を対象地区とした。
まず対象地区の店舗機能状況と空室状況を把握するため建物内の企業や空室を各階ごとに調査した。また、住む人·働く人·訪れる人をユーザーと定めて各ユーザーが馬車道エリアをどう利用しているか、時間帯ごとで読み取った。



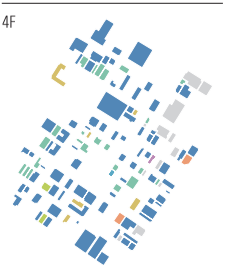




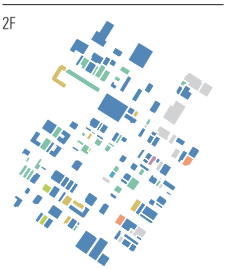






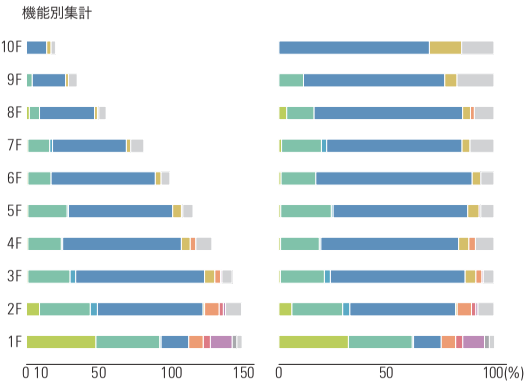








飲食
居酒屋·バーなど
病院全般
オフィス
住宅·マンション
サービス
公共
小売
駐車場



この地区の建物は一階部分に軽食系店舗が集中しており、駅前という好立地もあって空室が少ない。2階より上は大部分がオフィスで一部がバーなどであり、いくらか空室がある。
一方利用者は、平日昼過ぎから終業時間頃にかけての時間帯と、休日は終日閑散としている。また住む人·働く人·訪れる人をまたぐ主体として子供が想定できそうだ。
そこで時間帯ごとで営業形態を変える店舗と、空室利用を通して、エリア全体の時間帯ごとの利用率を上げることを目指す。

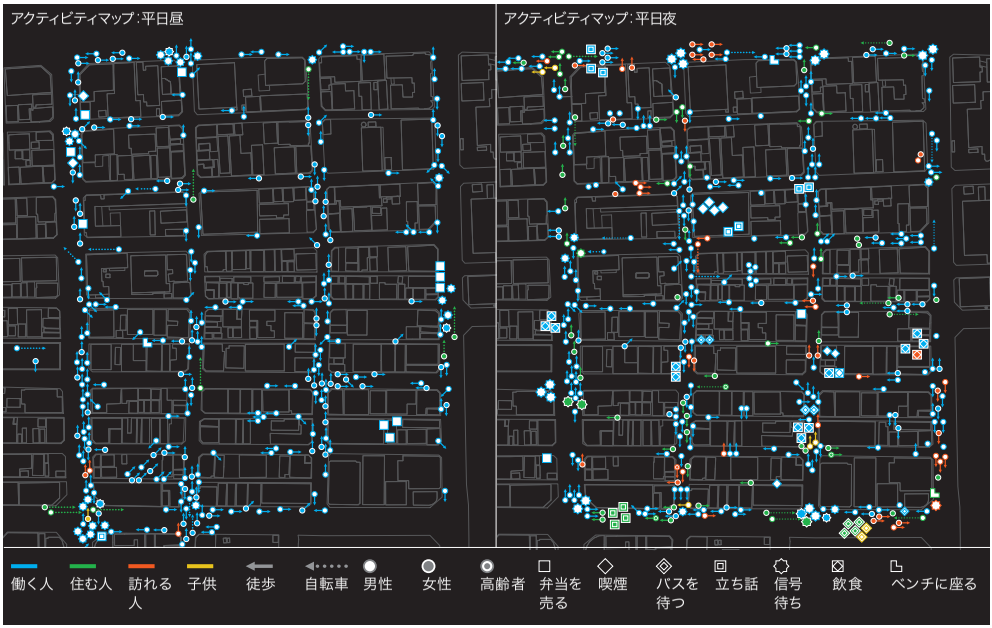
時間帯ごとのユーザー		時間			
		平日昼	平日夜	休日昼	休日夜
主体	住人	—	●	●	●
	働く人	●	●	—	—
	訪れる人 観光客	○	●	○	●

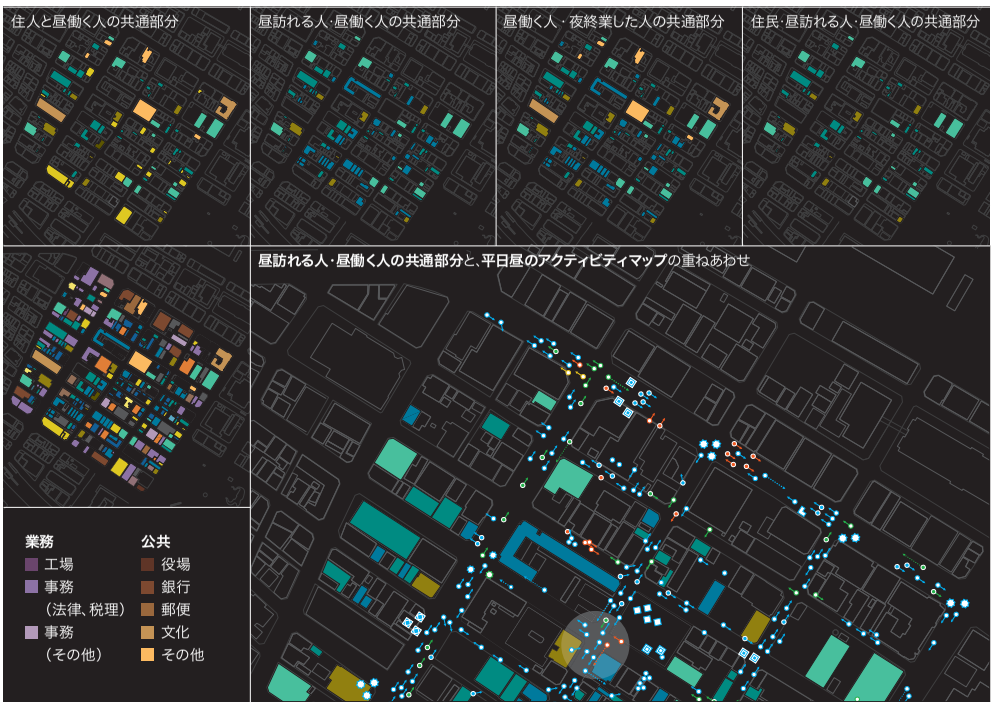
●室内にいる ●室外にいる ○通過 — いない

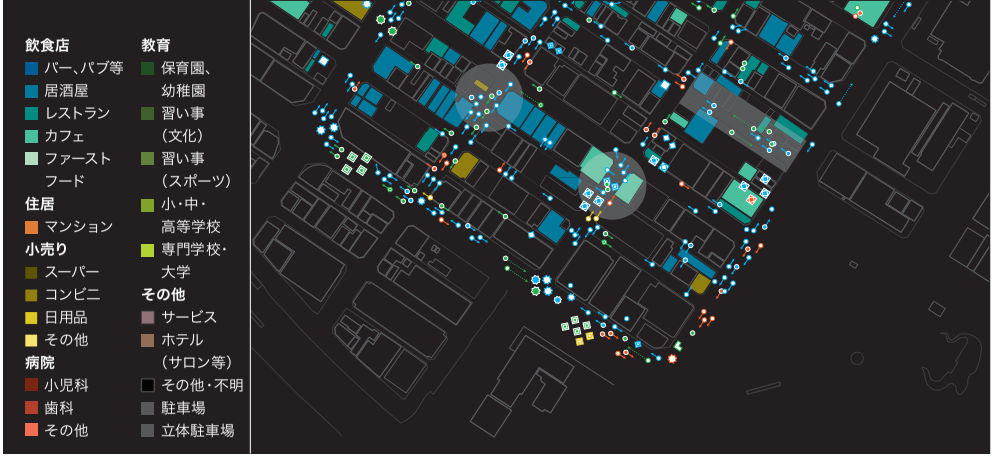
analysis: potential of space

分析2:ユーザー別のポテンシャルの検討

ユーザーに子供を加えて、ビデオ撮影した映像からアクティビティマップと、一階レベルのユーザーごとの利用を把握するための詳細利用図を作成した。この2つを利用して異なる時間帯、異なるユーザーで共通して利用できうる場所や通りを抽出し、それらを提案候補地とした。また平面・断面において現在の空間利用を模式化し、これを編集するような形で提案を行う。









平日日中：主な主体は働いている人。オフィスビルが立ち並んだ街区の建物内で働く人は就業している。アクティビティは建物内で完結している。



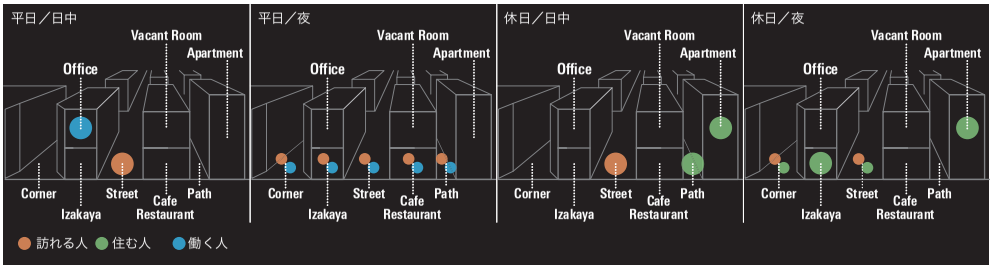
平日夜：主な主体は働いている人。サラリーマンのまちとして栄えてきたこの地域は、ビルの一階に多くの居酒屋・パブを持っている。その賑わいは街路にまで広がる。



休日日中：主な主体は住人。観光客も殆ど見受けられない休日のオフィス街で、住民は街区内または建物内に滞留している。またエリア内の生活機能は十分であるとはいえない。大通りを観光客が通過する。



休日夜：主な主体は住人と観光客。サラリーマンのための居酒屋の多くは閉まっている。数は少ないがレストランなどは営業しており、観光客や住人が休日の夜を過ごす。

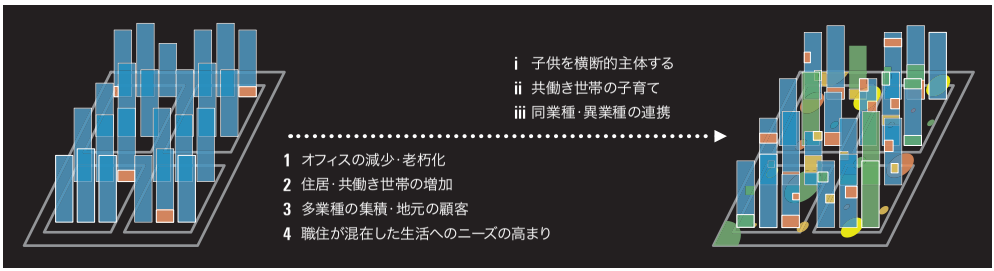


断面で見る用途と主体

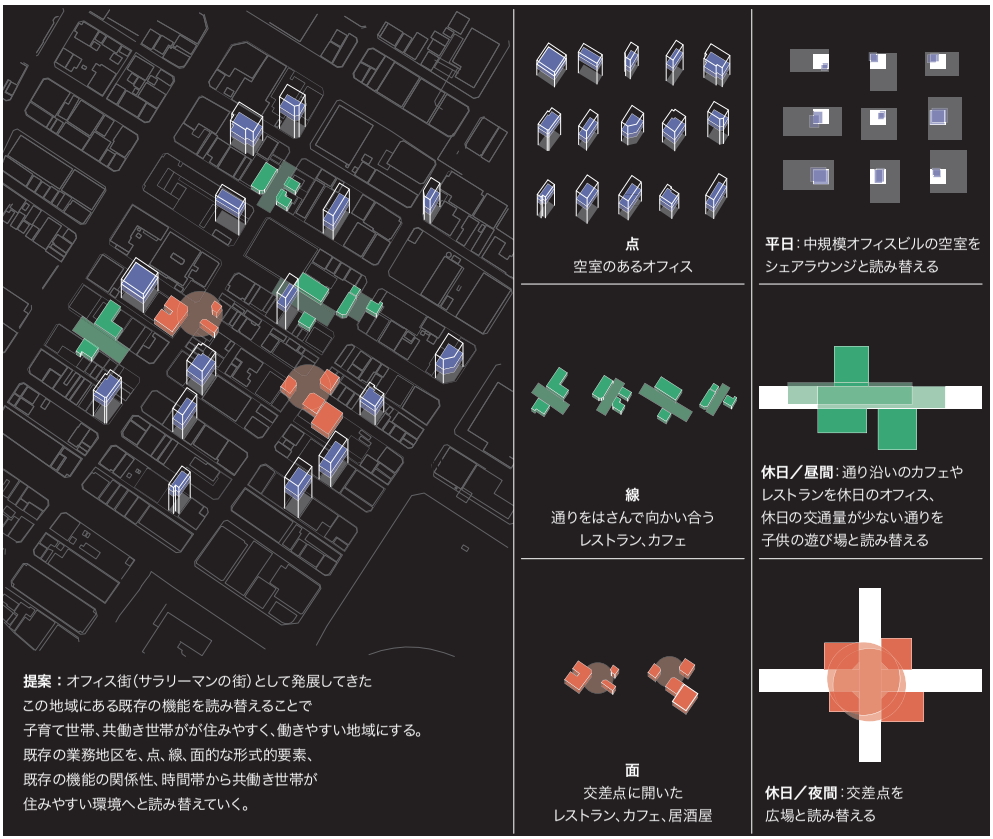
proposal: kannai area

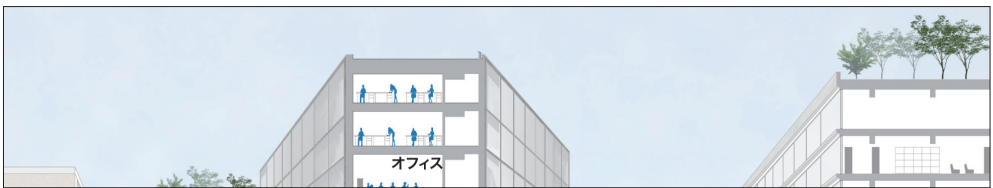
子供を媒介にした時間的ゾーニングによる職住近接型都市へ

1.オフィスの減少·老朽化 **2.**住居·共働き世帯の増加 **3.**多業種の集積 **4.**職住混在した生活へのニーズの高まりを背景に **i.**子供を横断的主体とする **ii.**共働き世帯の子育て **iii.**同業種·異業種の連携を目指す。調査によって選定した場所に点·線·面の時間ごとに利用形態を変えるプログラムを挿入することにより時間的ゾーニングによる職住近接型都市を提案する。

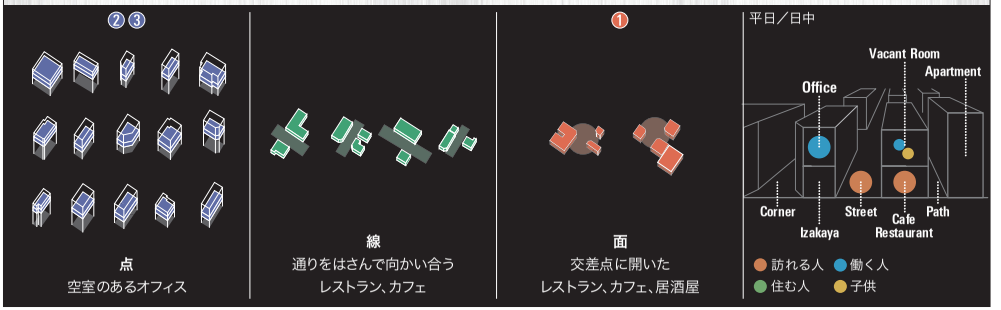


子供を媒介にした時間的ゾーニングによる職住近接型都市への書き替え。

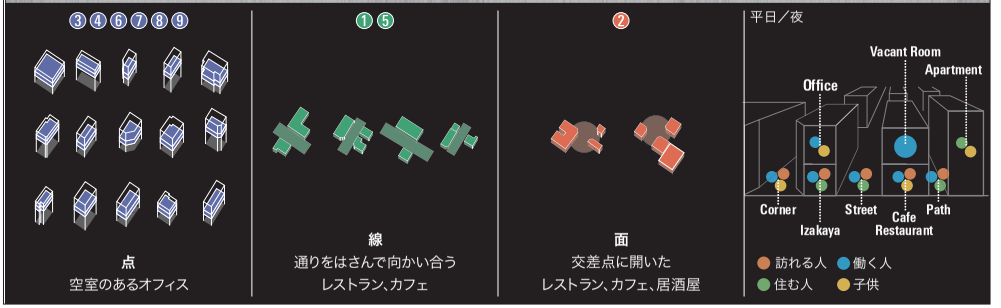












自習室と塾の切り替えや、飲食店と食品小売の切り替えなど、時間帯ごとで機能を切り替える。これにより空間の利用率を上げると共に、ユーザーのニーズに合わせた用途を効率よく運用することができる。また、託児所に子供を預ける住人と子供を預けにきたオフィスワーカーが出会うことなど、用途や主体が交わり切り替わる所で新たな交流が生まれる可能性があるだろう。

ゾーニング＋グリッド＋ペンシルビルという既存の都市構造を編集：ゾーニングによる計画の上に作られたオフィス街は、老朽化やオフィスの減少の一方、住人が増え、他業種が集積するという成熟をした。その流れを加速させ、どの時間においても開かれ利用できるような方向づけを行った。利用しうる場所の増加は、人々がそこで自分の生活を作り上げる助けになり、結果としてエリア全体の発展に繋げることができるだろう。



yokohama harbor city

studies 2012

D team

藤原和己 / 内藤祐輔 / 長谷川駿 / 秋葉正登 / 湯浅智朗 / 安留佳祐

Dチームが取り組んだのは、首都圏でも有数の観光地区であり、かつ巨大なオフィスビルが建ち並ぶ地区でもあるみなとみらいである。この地区には、さまざまな場所から、多くの人が訪れる。観光・通勤・ショッピング……目的は異なるものの、みなとみらい地区の年間来場者数は約5900万人にものぼり、これは横浜市の人口の36倍以上の数字である。

この多くの来場者によって、みなとみらいはどのように使われているのだろうか。これを明らかにするため、Dチームはまず、みなとみらいを入れる場所 / 入れない場所に塗り分けてみることを試みた。

都市にはいうまでもなく、誰もが自由に入れる場所が存在するが、みなとみらいの場合、その面積は、地上レベルに限っても100万m^2近いという。しかしDチームの観察によれば、その44%があまり使われることのない場所だった。こうした場所を、より多くのユーザが活用できるものとする——Dチームが見せようとするのは、より活気にあふれるみなとみらいの姿だ。

ユーザのタイプと、それにふさわしいアクティビティを読み解き、使われていない場所に新たなプログラムを重ね合わせ、観光客も、サラリーマンも、家族連れも、より自由にふるまうことのできる、公共空間の未来を構想する。

人々が行き交う国際的な観光地区みなとみらい

横浜の海岸線沿いに広がる大規模な商業施設や娯楽施設、オフィスビル。江戸時代の交易の拠点、戦後の物流拠点を経て、未来へ向けた観光拠点として再開発されたみなとみらい21地区は、水平方向に商業娯楽施設が連続し、その上部にオフィスやホテルが積層する近代的な都市構造を持っている。一方で、身体スケールを逸脱した広大な埋め立て地には、歩きながら巡る上で画一的な動線が表出し、その中に多様なユーザーが点在している。



research: access scale

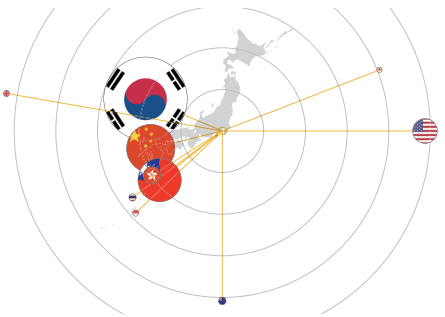
都市生活者をアクセススケールから解体する

観光地区みなとみらいには、様々な場所から人が集まる。それぞれの居住地とみなとみらいとの位置関係により、各個人の中にある都市の認識が異なると考えた。海外旅行先として、休日の遊び場として、通勤先として、散歩コースとしての、みなとみらい。

XL

外国からの観光客の割合と所要時間

1.	韓国	28.3%	2.5h
2.	中国	16.4%	3h
3.	台北	14.7%	3.5h
4.	米国	8.4%	11h
5.	香港	5.9%	4.5h
6.	オーストラリア	2.6%	10h
7.	タイ	2.5%	6.5h
8.	シンガポール	2.1%	7h
9.	イギリス	2.1%	13h
10.	カナダ	1.8%	10h

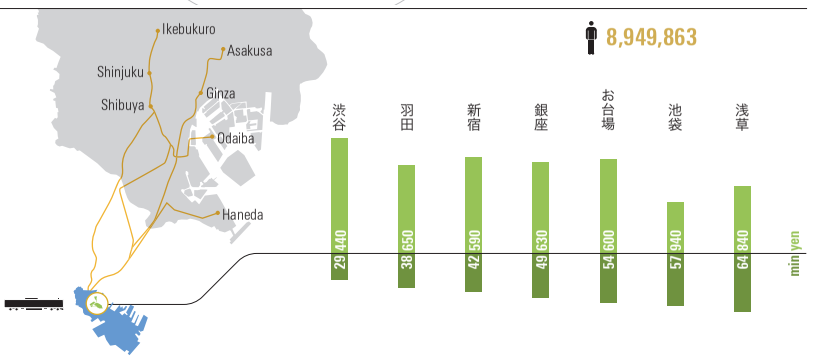


みなとみらいの公共施設の来場者数

145,000	横浜ワールドポーターズ
108,000	横浜美術館
107,000	クイーンズスクエア横浜
47,400	コスモワールド
47,300	横浜みなと博物館
31,100	ランドマークタワー
14,100	ランドマークプラザ
7,480	三菱みなとみらい技術館
6,390	横浜赤レンガ倉庫
3,820	カップヌードルミュージアム
1,840	万葉倶楽部

L

東京都の主要都市から
みなとみらいまでのアクセス
[電車]

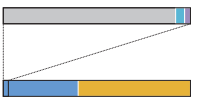


M

横浜市の人口とみなとみらい21の観光客数



横浜市人口 1,606,560人
西区 50,497人
中区 76,666人



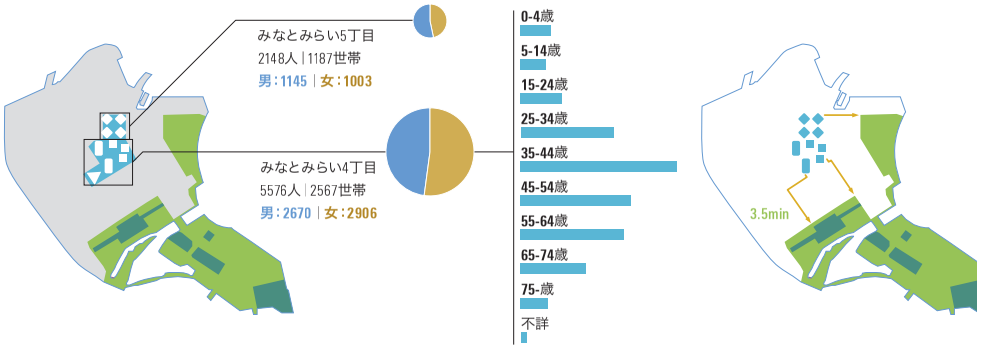
みなとみらい21地区年間来場者数
59,000,000人

来場客居住地
横浜市内 40%
横浜市外 60%

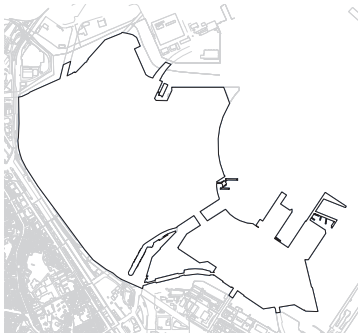
野毛、関内、徒歩からのみなとみらい21へのアクセス[自動車、自転車、徒歩]

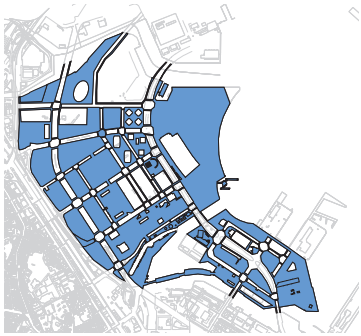


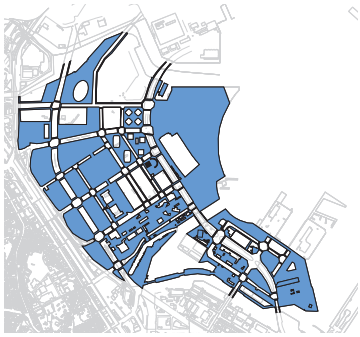
みなとみらい21の人口

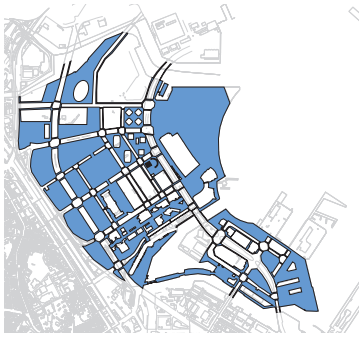


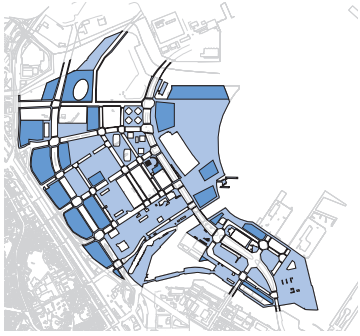
research: can enter / can not enter


調査エリア


入れる範囲 | 最大


入れる範囲 | 無料

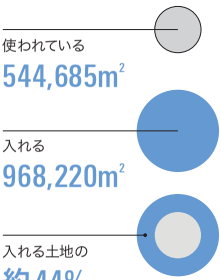

入れる範囲 | 最小


入りづらい場所（感覚）


使われている場所

都市を［入れる／入れない］で再考する

広大な埋め立て地には、使われずに放置された場所がたくさんある。レッシグの4つの制約要素［法・規範・市場・アーキテクチャ］を参照し、都市の入れる場所を、時間ごと、料金ごとにリサーチし、また入れるのに使われていない場所を洗い出した。その結果、入れる土地の約44%が使われていないことが見えてきた。

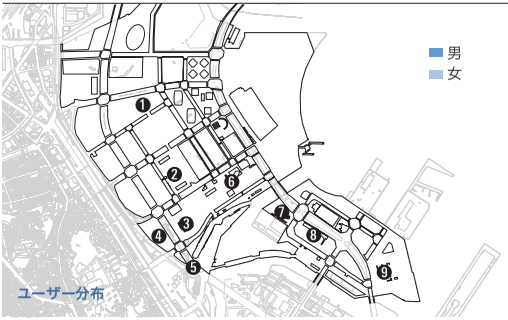


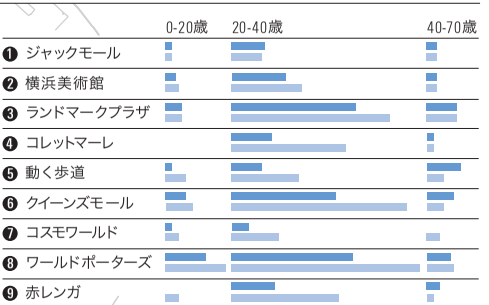
research: user and infrastructure

フィールドの「色」を見出していく

既存のゾーニングを解体するため、入れる／入れないマップをベースにし、フィールドに点在するユーザーの特性とそれを支えるインフラを整理するためのプロットと色づけを行った。

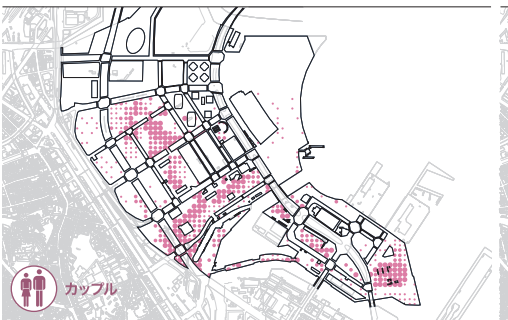
ユーザーの自由な活動を観察することにより、既存の都市のレイヤーの上に、都市計画上で目論まれていなかったであろう多様な都市の使われ方の可能性が見出されてきた。

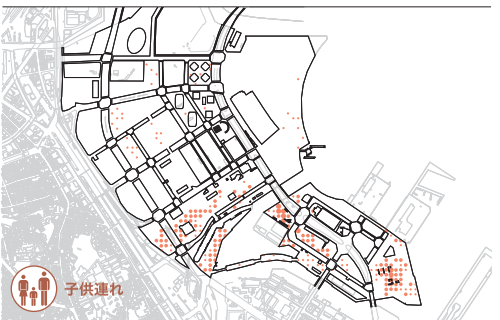






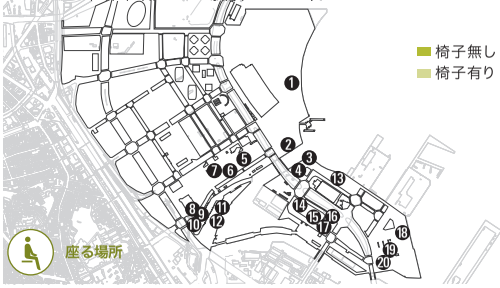


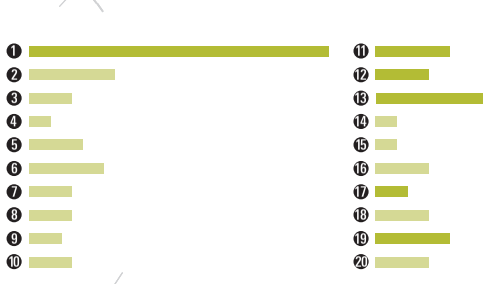




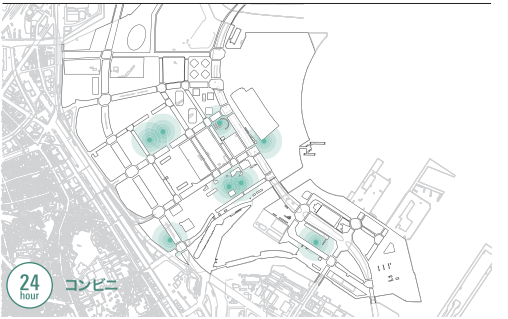


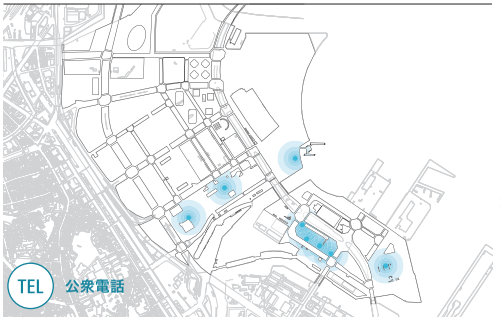














みなとみらいに新たなパラメータを設定する

色づけされたフィールドに新しい都市の使われ方を提案していくために、S、M、L、XLの4スケールのグリッドを設定し、多様な新規プレイヤーとアクティビティをパラメータとして当てはめる。プレイヤーとアクティビティをランダムに適応し、既存都市空間の特性およびユーザーの分布との呼応から、既存の機能に依らない都市の使われ方を導き出す。

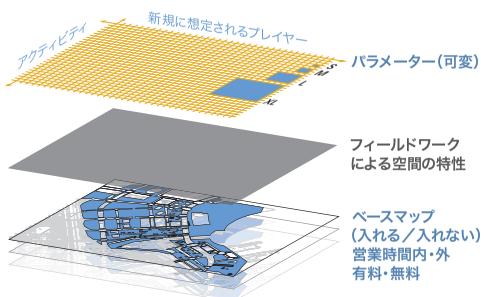
可変的で多様なパラメーター

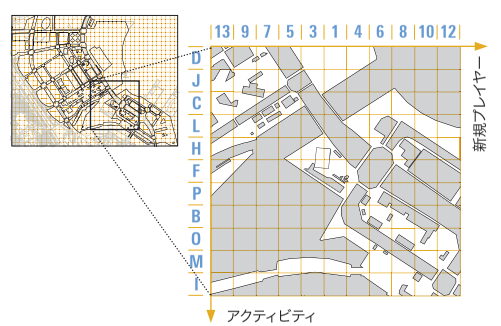
新規で想定されるプレイヤー

1 会社員
2 外国人
3 おたく
4 画家
5 ペット
6 アクティブ
7 NPO
8 子供
9 学生
10 カップル
11 ミュージシャン
12 カメラ好き
13 高齢者
14 車いす
15 親子
16 妊婦

アクティビティ

A 喫煙
B 読書
C ゴルフ
D パザール
E サッカー
F 恋愛
G ボルダリング
H 食事
I 自然とふれあう
J ディベート
K ダンス
L ライブ
M かくれんぼ
N 筋トレ
O ヨガ
P 睡眠



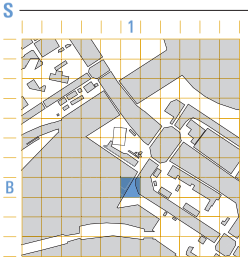


proposal: minatomirai area

場の条件とスケールから新たな活動を提案する

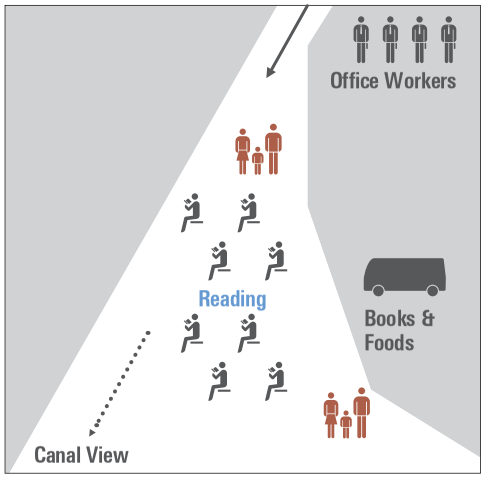
使われていない公共空間を対象に、既存のゾーニングに依らない新しい活動を提案する。グリッドにより選ばれる既存の都市空間と、フィールドワークによる色づけに呼応して、公共空間へ様々な新しい機能を提案することで、多様なスケールにおけるみなとみらいが持つポテンシャルを見出していく。各スケールにおいて、パラメータの条件をもとに、新しい活動のアイディアを提案していき、発散させる。これは都市の無限とも言える使われ方の提示となっていく。

S



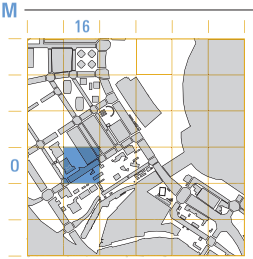
お昼休みの移動図書館

スケールS。50m×50mのグリッド。子供連れが比較的多く、インフラも整ったフィールド。ここに会社員と読書を適応するとき、例として提案するのは、「お昼休みの移動図書館」。道行く人や会社員のための休憩所となる。



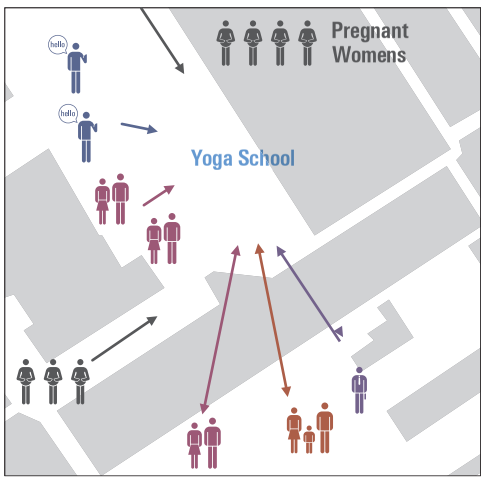


M



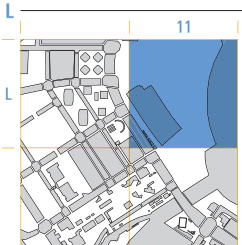
早朝ヨガ教室

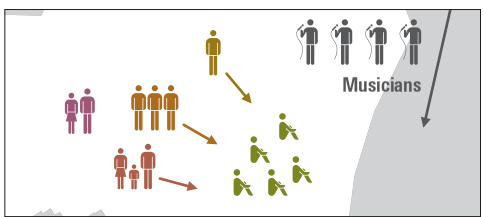
スケールM。200m×200mのグリッド。カップルが多く存在し、トイレが近くにあるフィールド。ここに妊婦とヨガを適応するとき提案するのは、「早朝ヨガ教室」。広場で行う妊婦のためのヨガ教室で、新しいコミュニティが生まれる。





L



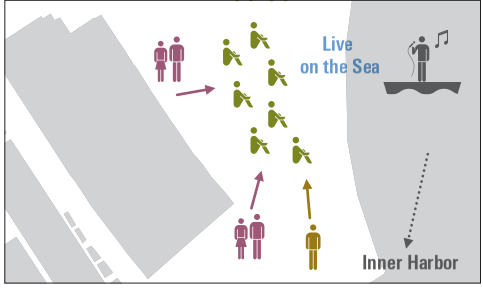






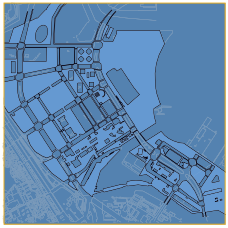
海を渡るライブ

スケールL。400m×400mのグリッド。一人で歩くひとが多く、座る場所がたくさんあるフィールド。ここにミュージシャンとライブを適応するとき提案するのは、「海を渡るライブ」。船に乗ったミュージシャンが海を渡りながらライブを行い、海岸沿いに点在するユーザーを繋いでいく。



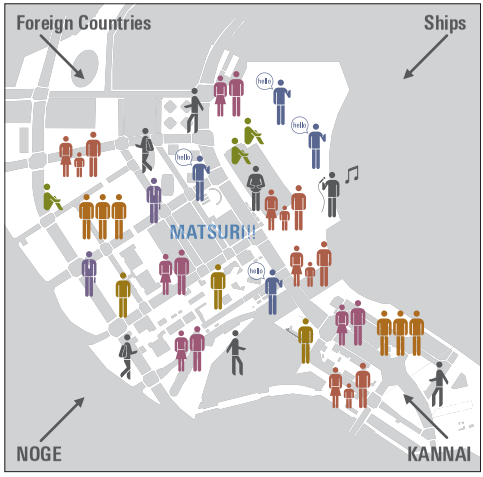


XL



みなとみらい伍年祭

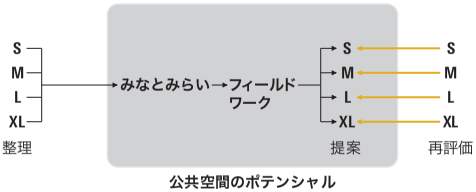
スケールXL。1200m×1200mのグリッド。みなとみらい全体を対象とし、多様なユーザーが散在するフィールド。ここに祭りを適応するとき提案するのは、「みなとみらい伍年祭」。5年おきの祭りは多様なプレイヤーが日常的に行うアクティビティを囲い込み、一つの祝祭都市が現れる。





提案をアクセススケールから再評価する

これまでの4スケールでの提案を、場に訪れるユーザーのアクセススケールから再評価する。それぞれのユーザーにとって、みなとみらいの認識は異なり、それぞれのニーズに沿うように多様な提案が適応していく。それによって、各ユーザーにとってのみなとみらいのポテンシャルが見出される。



公共空間のポテンシャル

アクセス：S

条件

場所：タワーマンション
距離：徒歩3.5分
頻度：毎日〜毎週末
構成：家族、高齢者
（将来増える可能性）

現状

タワーマンションの共有部の充実化
都市の非日常性の消失
観光地を比較的避けて生活

発見されるポテンシャル

日常の延長として広大な土地を
活用、外来者との接点の可能性
都市的イベントへの
自発的参加と継承

アクセス：M

条件

場所：野毛・関内・伊勢佐木地区
距離：車・自転車で10分
頻度：毎日〜毎週末〜稀に
構成：若者、日雇い労働者、家族

現状

都市空間のギャップ・距離間
半日常的な空間
都市利用は人によって様々

発見されるポテンシャル

日常的に入り込むことができる
場所としての可能性
商業や市民活動を発信する基点

アクセス：L

条件

場所：東京23区、首都圏内
距離：鉄道で30分〜1時間
頻度：毎日〜月に一度〜年に一度
構成：会社員、買い物・観光客

現状

会社員は駅からオフィスへの
画一動線
都市間競争から商業・アートの
充実
固定化されたイメージの消費

発見されるポテンシャル

会社員の活動領域の拡張、開放性
観光地の中の隠れたスポットを発見
各個人の都市イメージの創出

アクセス：XL

条件

場所：海外
距離：飛行機で1時間〜10時間
頻度：数年に一度〜一生に一度
構成：外国人観光客

現状

アジア圏から多数の観光客
スポット化する都市認識
Entertainment, Shopping,
Museums

発見されるポテンシャル

広大な敷地と充実したインフラ
イベントへの自発的参加と
異文化交流
近隣地域への観光客の誘導


XL

yhcs2012が提示したもの

門脇耕三

2012年9月29日、8日間のワークショップの成果を総括し、yhcs2012が何を見いだしたのかを明らかにするため、都市社会学者の町村敬志、建築家の西沢大良と藤原徹平、評論家の宇野常寛をゲストに招き、ヨコハマ創造都市センターにてシンポジウムが開催された。紙面が限られているこの場で、その詳細を紹介することは叶わないが、この多彩な顔ぶれを見るだけで、議論がいかに多岐にわたるものであったかは、容易に想像がつくだろう。そこで語られたのは、近代都市に固有の構造であり、それが表出させる建物の「構え」であり、あるいは人々のライフスタイルとアクティビティ、都市認知のしかた、などなどであった。つまり議論の対象となったのは、都市を構成する雑多な要素そのものである。しかし、これらのあまたの対象に共通する事態として了解されたのは、そのいずれもが、かつての姿を瓦解させつつあるということであった。現在の都市は、変容のはざまにあるというわけだ。

シンポジウムでの指摘を、一つだけ紹介しておこう。現在の都市は、情報技術の高度な発展によって、場所性はおろか、地理性さえ失いつつある——宇野による指摘である。たとえば、われわれにとって、都市内の移動の手立てをネット上の経路探索によって決定することは、すでに日常である。このとき、場所と場所が都市の中で取り結んでいた地理的布置は、われわれの認識からこぼれ落ち、場所どうしの関係は、「移動時間」という地理的・空間的情報を含まない尺度に還元されている。この事態は、地理と文化が保持してきた力関係の逆転を招いた。すなわち、地理的条件が、場所に固有の文化を育んできたこれまでの状況に対して、もはや地理的条件に依存せず、文化が興亡する時代に突入しているのだと、宇

野は指摘する。2000年以降の文化が、特定の場所に育まれてきたのではなく、むしろその場所をネット空間に移している現状に照らせば、この指摘はかなりの説得力をもって響いてくることだろう。

しかし本当のところ、現実空間は、文化の母胎としての存在意義を、このまま失っていくばかりなのだろうか。宇野の指摘に対して、この状況は、都市構造が変容し、その姿がとらえにくくなった過渡的状況によるものだとの反論は成り立たないだろうか。

yhcs2012に参加したすべてのチームが、インフォグラフィックスを用いながら鮮やかに可視化したように、都市は複雑で微細な情報を、その内にひそかに孕んでいる。こうした情報を、新たな社会構造に対応した都市構造として読み解き、増幅させ、それを現実空間に表出させることによって、その場所に固有の文化を育む、新たな「構え」を持つ都市は構想できないだろうか。

yhcs2012で提示されたのは、これを実現するための一つの仮説である。仮説は実行に移されねばなるまい。

yokohama harbor city studies
2012

横浜ハーバーシティ·スタディーズ
2012

2012年9月1日 - 9月8日
開催

主催：
YCCスクール、関東学院大学

ディレクター：
門脇耕三、南後由和

コーディネーター：
中津秀之

アドヴァイザー：
鈴木伸治

運営協力：
中川ちあき（YCCスクール）
岩井桃子（YCCスクール）
関東学院大学 中津秀之研究室

発行：
関東学院大学
〒236-8501 横浜市金沢区六浦東1-50-1
Tel & Fax：045-786-7133
（関東学院大学 中津秀之研究室）

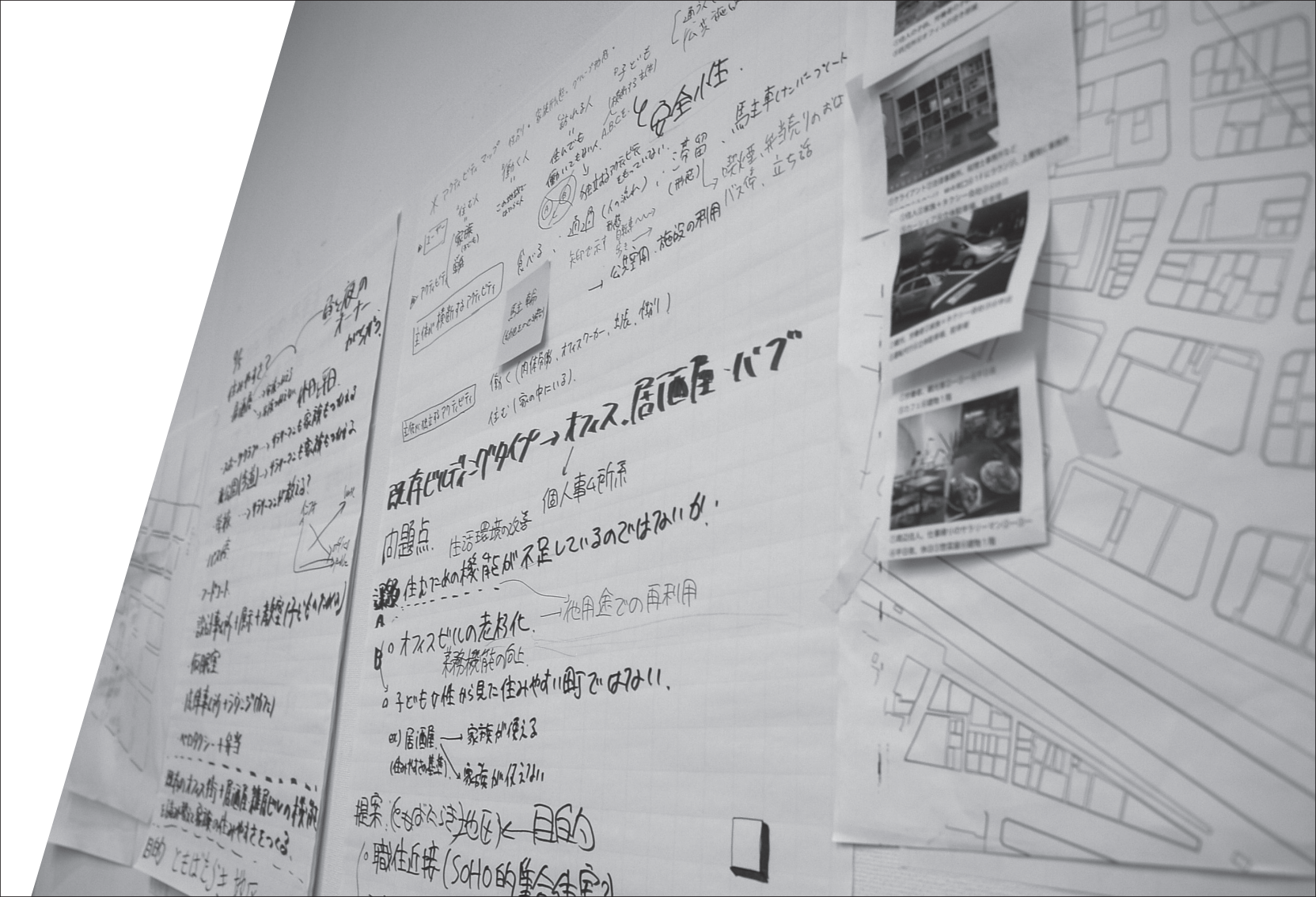
デザイン：
中野豪雄（中野デザイン事務所）

編集：
門脇耕三
南後由和
中野豪雄

印刷：
株式会社山田写真製版所

2013年3月発行

本書は、関東学院大学戦略的プロジェクト研究「地域における次世代を担う子どもを育む創造的アプローチに関する研究」により出版されたものです。


既存ビルディングタイプ→オフィス、居酒屋、バブ
内題点
住むための機能が不足しているのではないか。
個人事々所系
他用途での再利用
オフィスビルの老朽化
業務機能の低下
子ども女性から見た住みやすい町ではない。
居酒屋
家族が使える
家族が使えない
提案
職住近接(SOHO的集合住宅)
目的
地区
公共空間、施設の利用
バス停、立ち話
高齢者
交流
ベンチ

9/1 sat

11:00 / 開会式

11:30 / Lerture 1

Kozo Kadowaki
Yoshikazu Nango

都市の構え·読み替え·書き替え
門脇耕三 / 建築学者
南後由和 / 社会学者

14:00 / Lerture 2

Nobuharu Suzuki

横浜の歴史と成り立ち
鈴木伸治 / 都市デザイナー

15:00 / フィールドワーク·リサーチ·ブレスト

17:30 / ディレクターとのディスカッション

9/2 sun

10:00 / フィールドワーク·リサーチ·ブレスト

16:00 / Lerture 3

Yasutaka Yoshimura

インフォグラフィックスと都市
吉村靖孝 / 建築家

レクチャラーとの提案·作業内容に関する
ディスカッション

9/3 mon

10:00 / フィールドワーク·リサーチ·ブレスト

16:00 / Lerture 4

Hiroyuki Kubota

家族·若者·高齢者の変容と居住のあり方

久保田裕之 / 家族社会学者

レクチャラーとの提案・作業内容に関する
ディスカッション

9/4.tue

10:00 / Lerture 5

Takeo Nakano

インフォグラフィックスの基礎

中野豪雄 / グラフィックデザイナー

13:00 / インフォグラフィックスとグラフィックデザインに関するワークショップ
中野豪雄 / グラフィックデザイナー

yokohama harbor city studies 2012

9/5.wed

10:00 / リサーチ·提案作業

16:00 / Lerture 6

Yuri Naruse Jun Inokuma

シェアが切り開く建築と都市の新しい姿

成瀬友梨 / 建築家　猪熊純 / 建築家

レクチャラーとの提案・作業内容に関する
ディスカッション

9/6.thu

10:00 / リサーチ·提案作業

16:00 / Lerture 7

Ryosuke Nishida

「新しい公共」の広がりと課題
西田亮介 / 公共政策学者

レクチャラーとの提案・作業内容に関する
ディスカッション

9/7. fri

10:00 / 提案作業・プレゼンテーション

18:00 / Lerture 8

Masataka Baba

都市のリノベーション
馬場正尊 / 建築家

レクチャラーとの提案・作業内容に関する
ディスカッション

9/8. sat

10:00 / 提案作業・プレゼンテーション

Final Presentation

15:00 / ゲストを招いた最終発表会

18:00 / 閉会式・懇親会